＜神仏習合と修験道－祈り＞

日本はつくづく不思議な国である。明治以前は仏教、神道という異なる 2 つの宗教が違和感なく習合していたからである。神社の境内には、平然と五重塔が建っていたりした。今でも、比叡山では延暦寺の僧侶と日吉大社の神職が共に例祭を斎行するなど、その名残は見られる。

https://www.hanakaido.co.jp/paee2da6c/

他の国では、異なる宗教が習合するなど、あり得ない。たとえば、旧約聖書を共通聖典とするユダヤ教、キリスト教、イスラム教に於いてすら 1 つに融合することなく、場合によっては原理主義的になって互いに争ったりしている。

明治以降、陰謀的な策略によって仏教が攻撃・排除された、などという説も一部で流布しているようだが、それはさておき、何故、外来の仏教と仏教伝来以前から存在していた神道（的祭祀）という異なる宗教が習合できたのか？言うなれば、それこそ“和の精神”でもあり、万物に神々を見出す神道の考えが基になっているからなのだが、当の日本人ですら、何故、習合できるのか分からないのが実情である。

実は、そこには宇宙の本質に関わることが隠されている。そこで、またまたスミルノフ物理学にご登場頂くとしよう。更に、神仏習合の概念が祈りを本質とする修験道にも繋がっているので、修験道も併せて考察する。

1：神仏習合概要

仏教導入以来、明治までは神仏習合だった。神仏習合とは、例えば大日如来は天照大神と同一である、というような考え方で、様々な仏と神が融合しており、インドや支那の仏教思想には無い宗教哲学である。

八百万の神々は、様々な仏の化身として日本に現れた権現（ごんげん）であるという考えが本地垂迹（ほんじすいじゃく）で、逆に、仏が神の権化（ごんげ）で、神が主で仏が従であると考えるのが神本仏迹（しんぽんぶつじゃく）である。本地垂迹の代表は真言宗の両部神道と天台宗の山王神道で、両部神道では内宮の天照大神を胎蔵界の大日如来、外宮の豊受大神を金剛界の大日如来と見なす。

神本仏迹は伊勢の度会（わたらい）神道と京都の吉田神道が主体だったが、度会神道が南朝と結びつくことに依って勢力が低下し、吉田神道が主流となった。

胎蔵曼荼羅

金剛曼荼羅

Wikipedia

では、本地垂迹、神本仏迹のどちらが「正しい」のだろうか？“神仏習合”という言葉からすれば、“神”を先に言う以上、神が根本である。その神の概念はアヌンナキが人類に植え付けたもので、彼らは人間と同じ姿形をした存在だから、神々や仏なども人間ベースの容姿で描かれる。

しかし、＜スミルノフ物理学＞等に記載されているように、神の本質とはすなわち、エネルギーである。宇宙根源のエネルギー＝起源意識が分化して物質世界ができ、そこから生命体が発生した。仏の元は実在した人物の釈迦だから、物理的にも根源のエネルギー＝神が仏に優先する。

その仏＝釈迦が開いたのが仏教だが、仏や菩薩、如来などばかりに目を向けていては、神と習合した意味など解りようも無い。そこで、仏教の変遷に目を向ける必要があるが、神の本質がエネルギーである以上、まずは宇宙の真理を説明できるスミルノフ物理学の宇宙観から始めよう。

2：スミルノフ物理学から導かれる宇宙観と眞名井の宇宙観

いずれも極めて重要なことなので、繰り返しになるが、＜籠神社と眞名井神社＞に記載されている内容をほぼそのまま転記する。

①スミルノフ物理学から導かれる宇宙観

宇宙は始原、無限と言える大きさの負のエネルギーの意識体だった。（負のエネルギーの世界とは、負の透磁率、負の誘電率の世界である。）これを起源意識と言い、神としては創造主や天御中主神と言われる。それが黄金比フラクタル分割収縮し、正の世界（正のエネルギー、正の透磁率、正の誘電率の世界）である三次元宇宙が誕生した。そこから更に黄金比フラクタル分割収縮し、星、原子、生命体が発生した。すなわち、宇宙は秩序を形成し、進化が義務付けら

れているエントロピー減少の意識的生命体としての世界である。

物質宇宙はクラインの壺、メビウスの帯構造のねじれた複素空間で、エーテル繊維（エネルギー）で満たされている。エーテル繊維は負の性質を有する S 極磁気系と、正の性質を有する N 極電気系で構成され、それぞれ S 極磁気単極子、N 極磁気単極子を形成し、これら磁気単極子が物質の根源＝素粒子の基となっている。そして、メビウスの帯構造の裏表は正負の世界が向かい合わせとなっており、鏡像体やカバラに於ける「合わせ鏡」の基となっている。

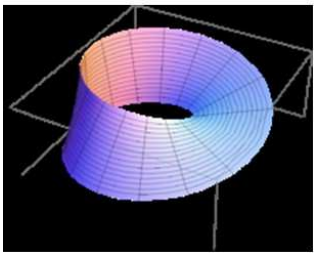
全宇宙は S 極系エーテル繊維が対数螺旋構造を成して繋がっており、起源意識から三次元宇宙へは、負のエネルギーが S 極系エーテル繊維を通じて供給され、生命エネルギーの本質となっている。このエネルギーを俗に“龍”あるいは“龍のエネルギー”と言う。宇宙のメビウスの帯構造は位相数学的に四面体と同義であるため、四面体によって宇宙を埋め尽くすことができる。従って、四面体構造を有する物質、例えば水やシリカなどは、負のエネルギー＝龍のエネルギーの良い媒体である。

そして、すべての星や原子の中枢には S 極磁気単極子が存在し、宇宙を貫く S 極系エーテル繊維に繋がっており、万有引力の基となっている。これに対して、N 極系エーテル繊維は宇宙空間にバラバラに存在するが、各エーテル繊維は宇宙全体を通して網の目のように存在する。

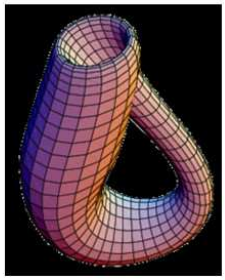
現在の宇宙は比較的初期の段階にあり、太陽系近辺の黄金比フラクタル分割回数は 137 回で、原子の微細構造定数の逆数として現れている。

太陽系は、元シリウスと言える巨大な恒星が黄金比フラクタル分割した結果、誕生した。元シリウスからはシリウス系恒星（シリウス A、C）と太陽（と近辺に存在する恒星群）が誕生し、元シリウスは現在、シリウス B と呼ばれる白色矮星となった。だから、シリウス B は太陽系にとっての、もう一つの起源意識とも言うべき存在である。また、白色矮星は高密度の重い天体だが、重力は S 極系エーテル繊維が集中している状態であるため、白色矮星は起源意識との繋がりが強く、シリウス－太陽系にとってエネルギー的にも、もう一つの起源意識とも言うべき存在である。そして、シリウス系の各恒星と太陽から更に惑星が誕生し、シリウス C からはアヌンナキの星ニビルが、太陽からは地球が誕生した。

メビウスの帯

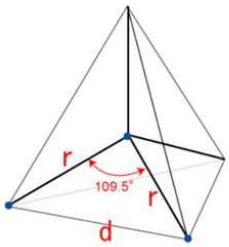


クラインの壺



Wikipedia

四面体

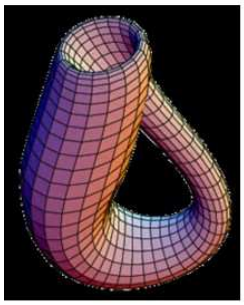


http://chemieaula.web.fc2.com/lecture/cos.html

②眞名井の宇宙観

眞名井の“眞”の字は、人が首を下向きにしている状態を象ったもので、“顛（てん：逆さま）”の原字である。つまり、我々が本質だと思っている物質宇宙は、実は本質＝主体（＝エネルギー体）である起源意識が客体（＝物質）となった状態であり、起源意識の中に浮かんで、主体である起源意識を直接を認識できないが、その負のエネルギーが噴出してくる井戸のような状態のクラインの壺、メビウスの帯構造である。それは、水や酒（メビウスの帯構造と同位相＝縮図である四面体構造を有する故に負のエネルギーを媒介できる物質）を入れるヒョウタンとしても喩えられ、眞名井神社の別名の 1 つが、ヒョウタンを意味する匏（ひさご）を冠した匏宮（よさのみや）であるのは、極めて暗示的である。また、匏宮は与謝宮とも書くが、“与謝”はシリウスの和名の 1 つ“与謝星”に由来し、それは夜空に明るく輝く夜の太陽とも言うべきシリウス A だけではなく、本質は、肉眼では見えない、起源意識に重なるシリウス B である。

クラインの壺



Wikipedia

ヒョウタン

http://blog.rustle.info/archives/274

眞名井神社

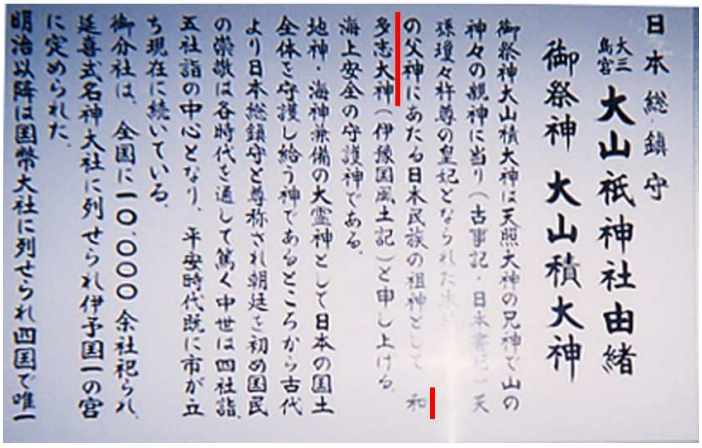
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%B1%A0%E7%A5%9E%E7%A4%BE

宇宙の歴史からすると、起源意識自身が、自らが何なのかを知るために、自らのエネルギーの分化である生命体とその活動の場（器）となる宇宙を創成した。それにより、エネルギーの塊の状態ではできなかった、“感覚”というものを通して感じ、様々なことを認識・経験し、進化できるようになった。古生代には海洋で生命種が爆発し、陸上へ進出する直前の段階で絶滅。その後、中生代には両生類が陸上に上がって爬虫類へと進化して巨大化したものの、変温動物では気候変動などに対応できず絶滅。そして、新生代に至り、恒温型で感覚器と思考する頭脳を携えた人類誕生となった。つまり、段階を経て、生命種が進化の頂点に達しては絶滅し、次の新たな生命種が登場し、ということを繰り返してきたわけだが、これは黄金比フラクタル分割と相似で、エントロピー減少の進化系である。

また、起源意識のエネルギー的分化は、次々に神々が誕生したことの真意である。だから、あらゆるものには神が宿っており、神の分化＝部分であって、かつ、神を構成する全体でもある。つまり、生命体は起源意識の一部であり、かつ、起源意識の全体を構成する。各生命体の意志を“志”とするならば、多くの“志”が和している状態が、この宇宙である。これを“和多志（わたし）”

と称し、日本語に於ける一人称“わたし”の語源だが、日本総鎮守とされる愛媛県の大山祇（おおやまつみ）神社では、大山積大神（オオヤマツミノオオカミ）を日本民族の祖神として“和多志大神”と称し祀っている。

大山祇神社の由緒書


日本総鎮守
大三島宮 大山祇神社由緒
御祭神 大山積大神
御祭神大山積大神は天照大神の兄神で山の
神々の親神に当り（古事記・日本書紀）天
孫瓊々杵尊の皇妃となられた木花
の父神にあたる日本民族の祖神として 和
多志大神（伊豫国風土記）と申し上げる。
海上安全の守護神である。
地神・海神兼備の大霊神として日本の国土
全体を守護し給う神であるところから古代
より日本総鎮守と尊称され朝廷を初め国民
の崇敬は各時代を通して篤く中世は四社詣
五社詣の中心となり、平安時代既に市が立
ち現在に続いている。
御分社は、全国に一〇,〇〇〇余社祀られ
延喜式名神大社に列せられ伊予国一の宮
に定められた。
明治以降は国幣大社に列せられ四国で唯一

さて、生命体が物質を認識したり、自らと他を区別するためには、名が必要となった。（人＝ヒト＝霊人としての自己の誕生。）それは単に、識別のためだけのものだった。しかし、人類型の生命体が誕生してから、「あなたとわたし」という単なる識別に、「あなたの物と私の物」という所有の概念＝我（が）が芽生え、それがいつしか膨らんで「アレが欲しい、コレが欲しい」という欲望が発生した。これがエゴ＝自我である。エゴがエゴを呼び、その所有欲は他者から奪う行為を発生させ、そこから憎しみが生まれて戦争が起こり、遂には、自らが起源意識の分身（＝己、巳、巳）であることを忘れてしまった。これはとりわけ、太陽系最外の惑星でシリウス系の惑星ニビルの住人アヌンナキが、ニビルの大気を修復するための金を採掘するために地球に降臨し、アフリカに居た猿人の遺伝子を操作して彼らに代わる採掘労働者としての人類を誕生させ、人類に対して“神”として振る舞い、人類が神を自らの外に求めることによって促進された。それにより、人類はエゴを膨張させてしまったのである。

換言すれば、人類はエゴという鎧でガチガチに固められてしまったことに因り、本来の性質（本質）が解らなくなってしまったのである。だから今に至るまで、人類型生命体の歴史は、その繰り返しである。その原因は、“名”に所有欲＝エゴが付随したことに尽きる。このような宇宙の状態を表したのが“眞名井”に他ならず、名の真相は宇宙の真理そのものである。

アヌンナキは猿人を遺伝子操作して人類を創り上げ、自らを人類に対する“神”として振る舞うことにより、いつの間にか人類に大きなくびき（カルマ）を負わせたが、むしろ、エゴを解消するという全宇宙的な宿命により、地球と人類を学びの場とさせられた、とでも言うべきか？だから、地球＝知球＝知宮と命名されている。他の言語では、決してこの真理は解らない。

3：インダス文明と仏教

ここまでは神仏習合の“神”の真意だが、“仏”に関わる仏教の発祥はインドである。インドでは仏教発祥以前からイナンナを最高神（創造神）とするインダス文明が存在し、仏教もその影響を大きく受けている。そこで、インダス文明についておさらいしよう。大部分は＜神々の真相 3＞からの引用となるが、詳細はそちらを参照頂きたい。

(1) タントラ、マントラ、ヤントラ

①タントラ

仏教は宗教と言うよりも哲学だが、ヒンズー教やバラモン教を通じて、タントラをベースとしたインド六派哲学が基礎である。インドの聖仙リシが保持してきたタントラは、チベット密教やヒンズー教のタントラよりも古く、インダス文明からの口頭伝承に依る本来のタントラ＝原始タントラである。

タントラ哲学＝インド六派哲学はサーンキヤ、ヨーガ、ミーマーンサー、ヴェーダーンタ、ヴァイシェーシカ、ニヤーヤ哲学である。

・サーンキヤ

この世を精神と物質の二元論で捉える。この 2 つの相克により人間は苦悩する。それ故、解脱のためには、精神と物質がまったく別のものであることを自覚する必要があると説く。

・ヨーガ

サーンキヤ哲学の中心に神を据えた。自我の欲望（＝エゴ）を滅し、宇宙と一体となる実践的システムを作り上げた。

・ミーマーンサー

祭祀儀礼の解釈。

・ヴェーダーンタ

ヴェーダを重視し、ウパニシャッド哲学の解釈を推進。

・ヴァイシェーシカ

自然哲学。

・ニヤーヤ

論理学。

原始タントラの直系とも言えるのが、サーンキヤ哲学とヨーガ哲学である。サーンキヤ哲学に於ける精神と物質は世界を生み出す原理であるが故に、精神原理（プルシャ）、物質原理（プラクリティ）と言う。プルシャは絶対神のことではなく、霊我とも言われるように、あくまでも個人的な自我の上にある存在のことである。陰陽で表すならば、プルシャが陽、プラクリティが陰であり、

プルシャは上向きの三角形、プラクリティは下向きの三角形で象徴される。タントラは人体のチャクラにも喩えられるため、誤って解釈するとダルマを踏み外して無意味な肉体修行を行ったり、カーマに堕ちる。ダルマとは、タントラの奥義を求めて神に近づくことであり、カーマとは男女の性愛である。

詰まるところ、タントラとは宇宙の真理を人体の神秘から知ろうとする、インドに於ける密教思想で、根源にはヴェーダがあり、そこには祭祀のしきたりや呪文、神々への讃歌などが記されている。最も重要で最も古いのがリグ・ヴェーダで、奥義書ウパニシャッドなどは有名である。その特徴は、人間と宇宙の対応にある。“永遠に存在する個人の本体＝我＝アートマン”と“宇宙の根本原理＝梵＝ブラフマン”は究極的に一体であり、一体化させるのが人間の生きる目的であり、それを“梵我一如”と言い、“悟りの境地”である。この概念はヘルメス思想と同じである。ヘルメス思想では、創造主と被造物は本質的に同一であり、同じ一者の異なる現れにすぎず、「全は一であり、一は全である」と考える。そして、下のものと上のもの、小宇宙と大宇宙が本質的に同一であり、互いに照応し合っていると考える。

すなわち、物質宇宙、とりわけ生命体は起源意識の一部であり、かつ、起源意識の全体を構成するという、眞名井の真理、和多志の真理と同じである。故に、神仏は習合可能である。起源意識を本とすれば、星々や生命体はその分身であり、ヒンズー教に於ける様々な化身で暗示され、仏教では様々な如来や菩薩などであり、神道では八百万の神々である。それは、起源意識を大元のエネルギーとする、エネルギー分化の象徴でもある。これこそが、神仏習合の本質である。

日本神話では、このエネルギー分化が象徴的に示されている。例えば、古事記に於ける神々の登場は次のようになっている。

・この天地の中心に、最初に天御中主神が現れ、次に万物を生み出す力である高御産巣日神（タカミムスビノカミ）と神産巣日神（カミムスビノカミ）が現れた。この三柱の神は、みな独り神として身を隠した。この頃の大地はまだ若く、水に浮く油のように漂っていたが、泥海の中からすくすくと生え出る葦の芽のように宇麻志阿斯訶備比古遲神（ウマシアシカビヒコジノカミ）が現れ、天を永遠に支える柱として天之常立神（アメノトコタチノカミ）が現れた。この二柱の神もまた独り神として身を隠した。以上の五柱の神は、天と地の仕組みそのものであって、男でも女でもなく、実体もなく、人々の前に姿を見せることはなかった。よって、この五柱の神を別天津神（コトアマツカミ）と言う。

天御中主神はエネルギー主体としての起源意識であり、同時に、そこから最初に分化した物質宇宙（客体）でもある。客体は主体からエネルギー供給されて存在し得る。主体は客体から情報をフィードバックされて進化し得る。従って、両者表裏一体の同一である。

高御産巣日神と神産巣日神は、万物を生み出す力だから、S 極系エーテル繊維、

N 極系エーテル繊維である。
　その後、エーテル繊維が 1 ヶ所にとぐろを巻いて質量粒子となったのが S 極及び N 極磁気単極子であり、ここから物質が生成したが、S 極磁気単極子が S 極系エーテル繊維によって全宇宙を貫いているので、天を永遠に支える柱と言え、天之常立神であり、宇麻志阿斯訶備比古遲神は N 極磁気単極子である。
　これらはあたかも実態が無いかの如く、ダークマター、ダークエネルギーとして存在している。“従来理論”では、宇宙の大部分を占めるこれらについて謎とされているから“ダーク”と言われている。そして、物質や生命の根源となっているから、別天津神なのである。なお、ここで言う天と地の仕組みとは、宇宙の仕組みである。この後、古事記では次のように続く。

・こうして天と地が生まれると、次に国之常立神が、続いて豊雲野神（トヨクモノノカミ）が現れた。この二柱の神もまた独り神として身を隠した。以後、男女ペアの神々が次々に 5 世代現れ、国之常立神から国生みのイザナギとイザナミまでを、神世七代（かみよななよ）と言う。

　ペアというのは陰陽やS極･N極のペアであり､物質生成のことを言っており、そこから生命の発生、人類の誕生を暗示する。
　消えてしまった反物質は、独り神として身を隠した、とも言えるが、国之常立神は天御中主神とも同一視され､生成した宇宙にはエネルギーの塊である“太陽”があり、そこから星が分化したことからすれば、国之常立神は“太陽”であり、豊雲野神は星である。
　なお、神世七代は創世記に於ける 7 日間の天地創造と、エンキが地球での労働を 7 日間周期としたことを暗示する。そして、隣同士の数の比を取ると、その比が次第に黄金比に近づいていくフィボナッチ数列は、見事に古事記に対応している。すなわち、古事記の初期の神は、宇宙誕生の仕組み（＝黄金比収縮）を暗示している。

・1、1、2、3
　最初の 1 は宇宙を生み出した起源意識。次の 1 は物質宇宙で、起源意識と表裏一体。そして 2、3 は高御産巣日神、神産巣日神。数字 3 は三柱の神でもある。

・5、8、13、21、34、55、89
　国之常立神、豊雲野神、そして男女ペア神 5 セット。5 と 8 は 1 桁、以降 89 までは 2 桁。これが、独り神と男女ペアの二人神という意味である。更に意味を考えるなら、イザナギとイザナミは、8 と 9 で、ヤーとククリ。
　次は 144 だが、3 桁だから主要な子の三神、スサノオ、ツキヨミ、アマテラス。また、イザナギとイザナミの国生み後の話なので、そこから地上の人類が誕生、と見なすと 144＝12 支族×12 人の使徒の国＝日本。国は多くの人の集まりだから、千、万などで表現される。ならば、14 万 4000 人（＝日本）、とも言える。何故、地上の人類誕生と言えるのか？両神の子、スサノオは高天原から追放され、出雲に降臨した。（日本書紀では新羅のソシモリに。）つまり、アマテラス

の孫のニニギが天孫降臨する以前に、既に地上に降臨していた。そして、ニギハヤヒはニニギよりも以前に降臨しており、一説には、ニギハヤヒは地上に降臨した最初の大王、とも言われている。ならば、カバラ的にスサノオはニギハヤヒと同一であり、ここから人類が誕生していったと見なせる。ちなみに、続く数列は以下。

・233：オシホミミ。
・377：ニニギ。
・610：ホホデミ。
・987：ウガヤフキアエズ。
・1597：神武。（1＋5＋9＋7＝22、安定化、宇宙意識。）

②マントラ（真言）

サーンキヤ哲学に依ると、世界の創造はプラクリティの動揺（振動）から始まる。プラクリティが振動して均衡を崩すと、その波紋は宇宙へ浸透し、能動的な現象世界が始まる。スミルノフ物理学的に言えば、プラクリティは全宇宙を貫くＳ極系エーテル繊維エネルギー（エーテル波）、起源意識から発せられる負のエネルギーである。左巻きＳ極系エーテル繊維は１ヶ所にとぐろを巻いて固まり、負の質量、左手系の光学活性を持ったＳ極磁気単極子となり、物質形成の基となっている。これこそまさに、プラクリティ振動による現象世界の開始を表していると言える。プラクリティは下向きの三角形で象徴されるが、起源意識からの黄金分割によるエネルギー分化の暗示である。

このプラクリティの振動を音によって表現したものがマントラとされる。マントラは聖なる音声で、宇宙の根源的な力であるシャクティが宿っているとされる。シャクティは女性原理に基づいているため、神妃を崇拝する呪文として説明されることもある。起源意識はすべてを生み出したので、女性原理である。このシャクティは、諏訪大社の前宮でミシャグチ神（＝御シャクティ）として祀られている。

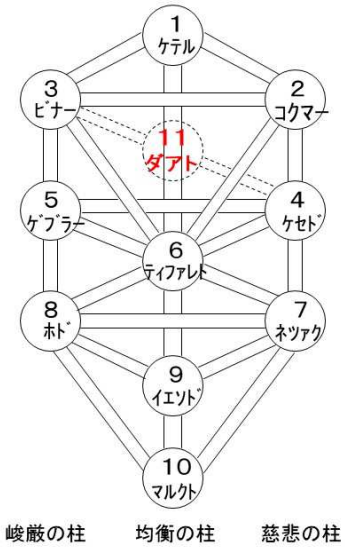
マントラの中のマントラ、聖なる音“オウム”は宇宙の根源的な音とされ、この音から絶対神をはじめとする森羅万象が生じたという。音とは波動だから、プラクリティの振動に他ならない。これをアルファベットで記すと〝AUM〟であり、阿吽（あ・ん、アーメン、アルファとオメガ、大神アヌ）に相当するが、実在の本質“サット・チット・アナンダ”が隠されている。それぞれ“真の実在・純粋意識・無上の歓喜”という意味で、瞑想に於ける究極の目的とされる。それ故、〝AUM〟は以下のトリムルティを表しているとも考えられている。

A：ブラフマー、U：ヴィシュヌ、M：シヴァ。

ブラフマー　ヴィシュヌ　シヴァ

学研NSMブックスエソテリカ宗教書シリーズ
「ヒンドゥー教の本」

生命の樹



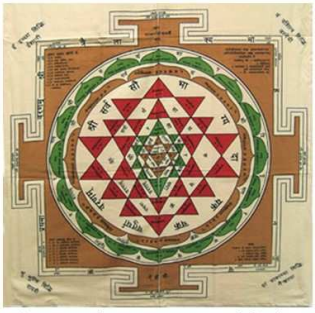
つまり、″AUM″とは音で表現された「生命の樹」であり、宇宙の創造・維持・破壊を表す究極のマントラである。神々にはそれぞれマントラがあり、シヴァのマントラはフリーム、カーリーはクリームなどと言う。因みに、阿弥陀如来はオウム・アミタプラバ・スヴァーハー、観自在菩薩はオウム・サマンタブッダーナーム・サハである。

サンスクリット語の呪文そのものがマントラである。インダス文明の創造神はイナンナだが、サンスクリット語などの言語はエンキの創造に依る。その音（おん）を漢字で音写したのがお経である。仏教に於ける最も重要なマントラは“オウム・マニ・パドメ・フウム”で、“全知全能の神、宝石が蓮華の中にあり＝「生命の樹」の中に真理あり”という意味である。マントラで重要なのは意味ではなく音声とされているのは、宇宙と共鳴する音霊（おとだま）だからである。つまり、エンキに依ってそのように創作された。

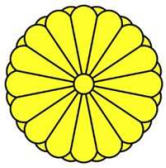
③ヤントラ

プラクリティの振動を視覚的に表現したものがヤントラである。基本図形は正方形で、その中に幾つかの同心円があり、8 枚と 16 枚の蓮華の花弁が描かれている。16 枚は当然、十六弁八重表菊紋の暗示で、8 と共に元はイナンナのシンボル“ロゼッタ”である。更に、その内部に上向きの三角形と下向きの三角形が重なり合うように描かれている。上向きの三角形はプルシャ、下向きの三角形はプラクリティであり、重なり合っていることにより陰陽の無限の合一を象徴する。何よりも、ベースとなっている正方形は陰陽で言えば陰で、日の丸の白地であり、同心円は日の丸の丸である。日の丸の丸は天照大神で、起源意識の光の側面、白地は起源意識の負のエネルギーの側面である。

ヤントラ

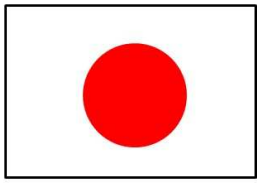


学研NSMブックスエソテリカ宗教書
シリーズ『ヒンドゥー教の本』



ロゼッタ

新潮古代美術館1
『オリエントの曙光』



ヤントラは後に曼荼羅となった。曼荼羅とは“円”を意味し、タントラの宇宙観を表現している。円は終わり無き“永遠”を象徴するシンボルで、“永遠、不老不死”の根源は、インダスの創造神イナンナである。そして、曼陀羅は三神三界を表した「生命の樹」の象徴でもある。

マントラ、ヤントラは永遠なるもの＝宇宙創造の意識（起源意識）と一体となる＝梵我一如を達成する秘術と見なされている。

(2) ヨーガとチャクラ、北斗七星

ここまではサーンキヤ哲学を見たが、ここからは原始タントラのもう 1 つの直系とも言えるヨーガ哲学を見てみよう。

ヨーガ哲学とは、サーンキヤ哲学の中心に神を据え、自我の欲望を滅し、宇宙と一体となる実践的システムである。ヨーガの実践方法については大きく 2 つの流れがあり、1 つは顕教としてのラージャ・ヨーガ（王者のヨーガ)、もう 1 つは密教としてのハタ・ヨーガである。前者は、ひたすら欲望を無くすことを主眼とし、欲望から解脱することで悟りを開く。このヨーガの実践者をヨギンと言い、マントラを唱えながら実践する。釈迦が行っていたのは、このヨーガである。欲望とはすなわち、エゴに他ならない。

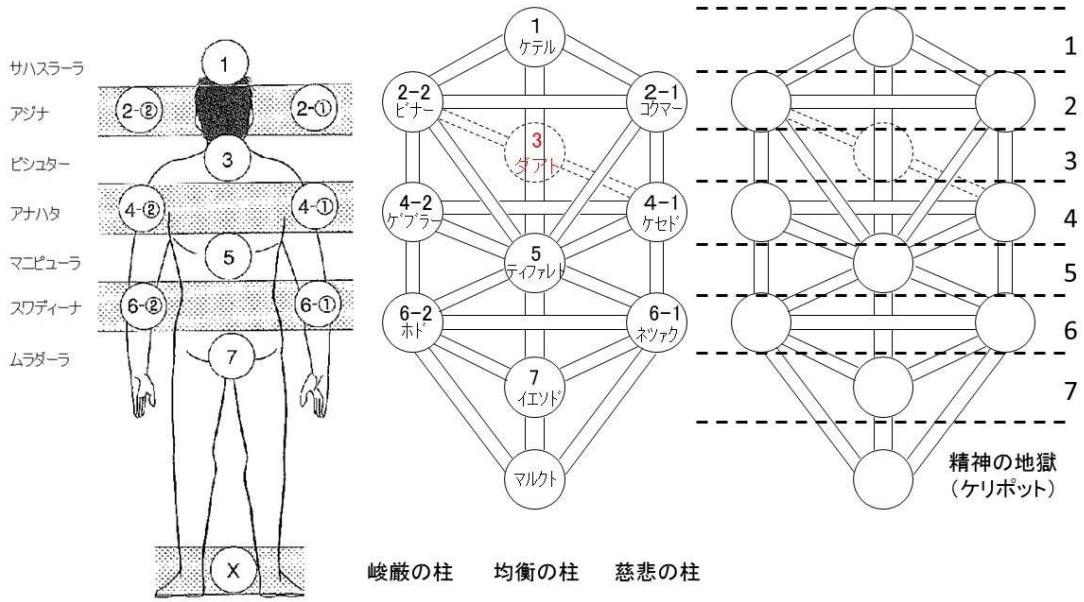
ラージャ・ヨーガの経典とも言うべきヨーガ・スートラ（スートラとは教典のこと）には八支ヨーガと言われる修行の 8 つの階梯（禁戒、歓戒、坐法、調息、制感、凝念、静廬、三昧）が記されている。消極的な修道の概念であるニローダ（心の動きを抑止すること）を標榜し、哲学的追求に重きを置いた形而上学的修道論である。

これに対して、ハタ・ヨーガはサーンキヤ哲学に基づき、俗的な属性であるプラクリティの否定によって聖なるプルシャとの合一を目指す。そのため、ラージャ・ヨーガのような階梯を踏まえず、一気に三昧（ざんまい）に至る方法である。ラージャ・ヨーガよって顕現したパワーを使い、俗的な世界を積極的に聖化させ、神々との合一を図る。このようなハタ・ヨーガは神秘思想とも言うべきものであり、仙人の概念へと発展し、道教、密教、禅の根源となった。

タントラでは、実際の身体に対して“微細身体”と呼ばれる存在を想定する。これは、肉眼では見えず、触れることもできないが、肉体と同じ形、大きさであるとされる。微細身体には、脊椎に沿って 7 つの霊的中枢があると考える。この霊的中枢をチャクラと言う。チャクラとは“輪”という意味で、ヨーガを極めし者には霊的中枢が円形に見えるらしいことから、このように言われる。

チャクラはカバラで「生命の樹」のベースとなっている、後ろ向きの神の姿アダム・カドモンと対応し、背骨に沿うセフィラ（複数形がセフィロト）だけでなく、左右のセフィラを中心に合わせた 7 段階を示す。（以降の人体図は、断りの無い限り、『古代インド核戦争の謎と大魔人シヴァ（学研ムーブックス、ネオ・パラダイム ASKA)』より。なお、チャクラは各臓器や顔の各部分も対応するが、ここでは割愛する。）

1：サハスラーラ（頭頂）、2：アジナ（眉間）、3：ビシュター（喉）、4：アナハタ（心臓）、5：マニピューラ（臍）、6：スワディーナ（丹田）、7：ムラダーラ（会陰）。



「生命の樹」に於ける慈悲の柱は陽、峻厳の柱は陰で、均衡の柱は両者が一体となった太極を表す。それ故、慈悲の柱、峻厳の柱にある同じ高さのセフィラは、均衡の柱に於いて 1 つに統一することができる。このような、均衡の柱に於いて 1 つに統一された 7 段階の「生命の樹」を基に、インダスの創造神であるイナンナの“冥界下り”の逸話が創られた。

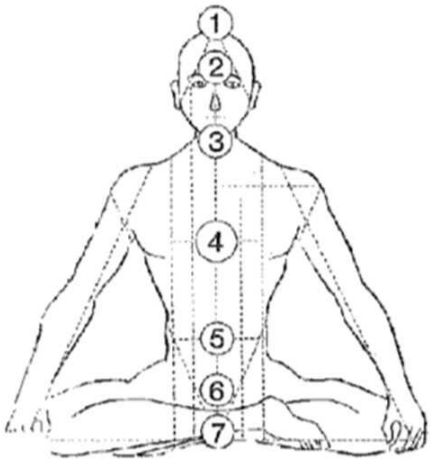
イナンナは、ドゥムジの亡骸を取りに“下の方の世界＝南アフリカ”に行ったのは事実だが、それが、冥界に下ったとされたのである。彼女は冥界の 7 つの門をくぐり、掟に従い、身に着けていたものを 1 つずつ取られていった。第 1 の門では頭を飾る大王冠、第 2 の門では耳飾り、第 3 の門では首飾り、第 4 の門では胸飾り、第 5 の門では誕生石をあしらった腰帯、第 6 の門では腕輪と足

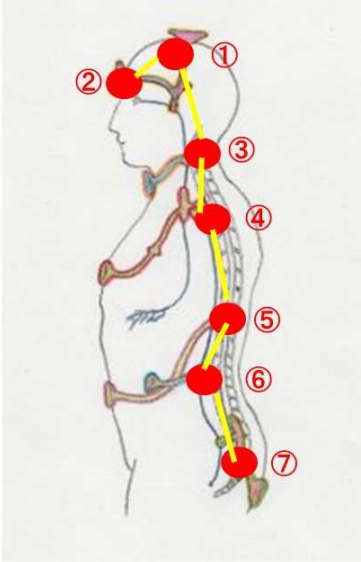
輪、第 7 の門では立派な衣服を。第 6 の門までは見事にアダム・カドモンの①～⑥に対応する。第 7 の門は衣服を脱ぐが、これは全裸となり、性器を顕にすることと同義なので、これもまたアダム・カドモンの⑦に対応する。

イナンナはこの後、木に掛けられて瀕死の状態となるが、これは「生命の樹」をマルクトまで降下することと同義である。そして、エンキの使者が持って来た「生命の水」を飲み“復活”して、無事ドゥムジの亡骸を取り戻した。これは、マルクトから「生命の樹」を上昇したことと同義である。

すなわち、イナンナが掛けられた木は「生命の樹」であって、処刑にも等しい扱いを受けた冥界は、地獄でもある。そして、この話は世界中の冥界下り話の根源となった。

さて、ここで脊椎に沿う 7 つのチャクラを見てみると、北斗七星の形を取っていることが分かる。人体のチャクラが何故、天帝の御者とされる北斗七星の形を形成しているのであろうか？





http://haroisystem.com/sakana/topics.php?TOPICS_ID=zazensaho_11

ヨーガでは、7 つのチャクラに大宇宙から絶対的エネルギーであるプラーナが降りると、チャクラの門が次々と開いて覚醒するとされる。そうすると、ムラダーラ・チャクラで眠っていた生命の根源エネルギーであるクンダリーニが覚醒し、大宇宙の真理と一体化するために脊椎を上昇する。クンダリーニは 3 回転半のとぐろを巻く神蛇で象徴されるが、これは「生命の樹」に 3 回転半で絡まる蛇である。

現在流布しているヨーガでは、次のように解釈されている。まず、呼吸を整えることにより、空間に充満している特殊な宇宙エネルギー“プラーナ”を取り入れる。いわゆる“気”である。そして、ヨーガの独特なポーズにより会陰部を刺激し、ムラダーラのクンダリーニを活性化させる。蛇のとぐろを解きほ

ぐすように、意識によってクンダリーニを脊椎に沿って上昇させる。上昇は熱さや振動として感じられる。上昇できるまでは、決して精を漏らしてはならない。最終的には、頭頂のサハスラーラまで上昇させる。クンダリーニは神妃シャクティ、サハスラーラはシヴァであり、両者の神秘的な結婚により梵我一如を達成する。サハスラーラまで上昇したクンダリーニは、体の正中を通してムラダーラまで戻し、クンダリーニを体内で循環させる。これを大周天と言い、これを達成できれば超人（仙人）となることができるとされる。

つまり、大宇宙の根源的エネルギーであるプラーナを体内に取り入れて循環させることがヨーガの極意であり、その要となる人体のエネルギーポイントがチャクラである。

大宇宙の根源的エネルギーとは起源意識の負のエネルギー＝S 極系エーテル繊維エネルギーに他ならず、日本の神で言うならば天御中主神であり、天体としては天に於ける不動の星、北極星である。北極星が天御中主神であることを表しているのが、諏訪大社の本宮と前宮の間にある、天御中主神を祀る北斗神社である。（前宮では、御シャクティ＝ミシャグチが祀られる。）

道教に於いて、北極星は天帝の星で、その御者が北斗七星である。チャクラが人体に於いて北斗七星を形成し、北斗七星が天帝の星＝起源意識の御者であるならば、大宇宙の縮図が人体であることに他ならず、人体は大宇宙に対する小宇宙であって、エネルギー的に相互作用しあう関係にあることを意味する。

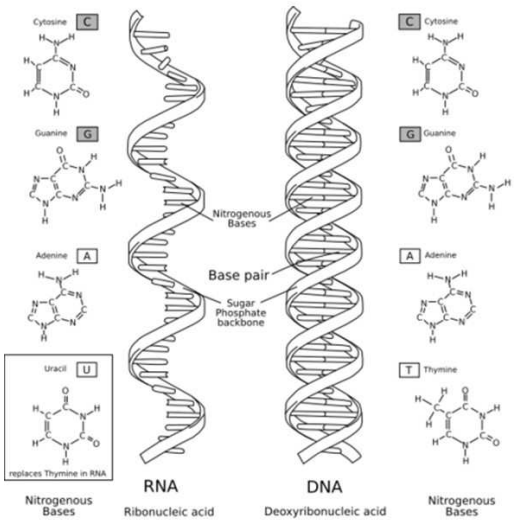
ここで、小宇宙たる人体を制御しているのは DNA である。DNA はトロイダル・コイル＝テスラ・コイル構造（コイルの導線自体が更に細かいコイルになっている構造）で、内部は互いの電磁誘導によりゼロ磁場となって電気抵抗がほぼゼロとなり、発熱することなく、大きな電流が流れる。その電流エネルギーは、エーテルエネルギーを取り込んで得たエネルギーであり、故に、生命体は自己の周囲に常温プラズマ＝オーラを発する。むしろ、この構造があるため、宇宙空間に充満するエーテルエネルギーを取り込める。

非常に近接した右巻き二重螺旋構造は、電磁誘導の法則により常温トポロジカル超伝導回路（電気回路に抵抗があろうとも、電磁誘導の法則に基づき、室温で無限大に近い電流が流れる超伝導の原型を成す回路）として DNA が作動することを可能とする。それにより、巨大電流が DNA 上を流れる。電流は N 極系

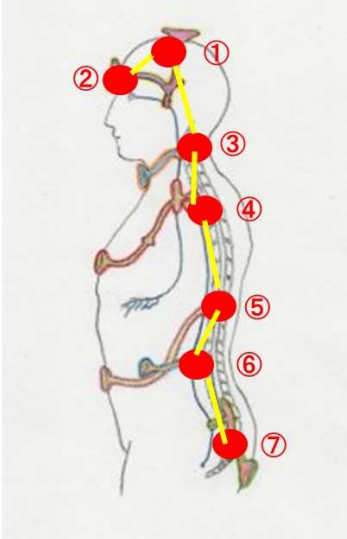
だから、負の質量、負のエネルギーである S 極磁気単極子を強力に集めることとなり、負のエネルギーが生命体体内の隅々まで送り出されるが、負のエネルギーは反エントロピーの源泉故に、生命体は必然的に進化する。

すなわち、DNA は、宇宙全体を貫いて起源意識に繋がる S 極磁気単極子を人体に取り入れ進化させる作用をしており、従って、人体は大宇宙に対する小宇宙と言える。

ヨーガに於いて、プラーナによって 7 つのチャクラが活性化すると、3 回転半のとぐろを巻く神蛇で象徴されるクンダリーニが覚醒し、脊椎を上昇して頭頂のサハスラーラに至るとされるのは前述の通りだが、負のエネルギーの左巻き S 極系エーテル繊維が 1 ヶ所にとぐろを巻いて固まった負の質量を有するのが S 極磁気単極子であることからすれば、クンダリーニの活性化とは、体内に眠り、起源意識と繋がることができる S 極磁気単極子の活性化、ということに他ならない。

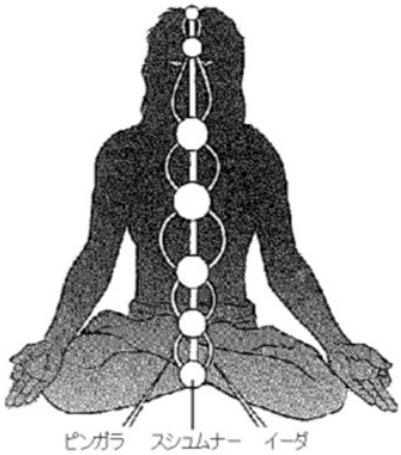


Wikipedia



http://haroisystem.com/sakana/topics.php?TOPICS_ID=zazensaho_11

また、プラーナの通り道を気道（ナーディー）と言うが、ナーディーは血管や神経のように張り巡らされ、72,000 にも達すると言う。その中で最も重要なのは 3 本ある。脊椎を貫くスシュムナーを中心に、体の右半身から脊椎に絡みつくピンガラ（太陽のナーディー）と、左半身から絡みつくイーダ（月のナーディー）で、太陽と月に象徴されるように、右が陽、左が陰である。これは、人体としては脊椎を中心とした中枢神経と自律神経を示しているが、アダム・カドモンを正面に向けた時の、3 本柱の位置に相当する。そして、3 本のナーディーの交差点にチャクラが存在し、「生命の樹」に於けるセフィラを統合した時の状態である。（インダスでは創造神イナンナが女神のため、アダム・カドモンは正面を向いているが、いずれにしても右手＝慈悲の柱が陽、左手＝峻厳の柱が陰である。）



つまりチャクラとは、人体のすべてが「生命の樹」として成り立っていることを象徴しており、むしろ、人体の構造が大宇宙に通じるものであることから、神界に通じる奥義を「生命の樹」として象徴し、カバラとしたのである。

チャクラは 3 本のナーディーの交差点にあるため、締め付けられた状態になっている。ヨーガによってチャクラが覚醒すると、開花した蓮華として象徴される。各チャクラの蓮華の花弁の数と色は、次のようになっている。

・サハスラーラ：1,000 枚・光
・アジナ：2 枚・白
・ビシュター：16 枚・薄紫
・アナハタ：12 枚・金
・マニピューラ：10 枚・青
・スワディーナ：6 枚・朱
・ムラダーラ：4 枚・赤

いずれも象徴的な数字や色で、様々な解釈が可能だが、特にサハスラーラはどのような衆生をも漏らさず救済しようとする千手観音を暗示する 1,000 と光である。また、ビシュターは隠されたセフィラ「ダアト」で、知恵を知ることの暗示だが、十六弁八重表菊紋と最も高貴な色を暗示する 16 と紫である。

(3) カーマ

カーマでは、チャクラ活性のために性愛を利用する。男（＝陽）と女（＝陰）が共に行うことにより、シャクティとシヴァの完全なる合一を達成できると考える。男女が交接し、男が精を漏らすことなく、互いに気を循環させることに依り、梵我一如を達成する。インドではカーマ・スートラ、支那では房中術、日本では真言立川流など。特に、インドのカジュラホ寺院やチベット密教の歓喜仏は有名である。

カジュラホ寺院壁画

http://www.abaxjp.com/ind02-khajuraho/ind02-khajuraho.html

歓喜仏

https://search.yahoo.co.jp/image/search?rkf=2&ei=UTF-8&p=%E6%AD%93%E5%96%9C%E4%BB%8F

こんな秘儀を人類に教えたのは、言うまでもなく、インダスの創造神で知恵の女神、愛の女神イナンナ＝般若波羅蜜多に他ならない。

北インド・ラダック・アルチ寺院の女神・般若波羅蜜多の壁画
立川武蔵、「『般若心経』の女神」、中日新聞掲載の連載記事『ブッダをたずねて』(2013年2月9日付の朝刊)。

ニビルの神殿では、創造神＝起源意識が祀られていた。神殿で神官と巫女が交わることで発生する性エネルギーを、シリウスや起源意識のエネルギーに共鳴させ、新たなる現実を創造していたという。性エネルギー＝クンダリーニの活用の知識こそ、神々＝アヌンナキが人類に封印した最大の秘密に他ならない。
その理解が不十分な場合、単なる性愛に溺れるが、それを“カーマ（左道）に堕ちる”と言う。

さて、前述のヨーガでお気づきだろうか？精を漏らさず、というのは、男に対する言葉。では、女性は？子宮の振動が脊椎を伝って体全体が反応する女性の真のオーガズムは、まさしく梵我一如である。つまり、男は女性のエネルギーにあやかるわけである。これは、すべてを創造した起源意識は「生み」の性質なので女性性であり、女性は子宮を通じて直に“繋がっている”からに他ならない。（＝子宮の振動、地球の振動。）だから、神の啓示を受け取るのは、圧倒的に女性が多い。（本来、出産時にも子宮は振動するのでオーガズムとなるはずが、アヌンナキと異種交配したため、苦痛を伴うようになった。）

しかし、ヨーガにしろカーマにしろ、いずれも肉体的な面だけであり、“本来の知恵＝宇宙の真理”を知ることが欠けている。

(4)仏教
ここまでが仏教の元となるインダス文明の思想・哲学である。しかしながら、仏教はインダス文明の影響を受けているだけではない。エジプトやイナンナを最高神とするフェニキアの影響も多大である。そこで、エジプトやフェニキアとの関わり（主に＜神々の真相 4＞＜日本の真相 6＞）を見てから、仏教の本論に入るとしよう。

①フェニキアとの関わり

東大寺大仏像

Wikipedia

蓮　パピルス

https://www.karakusamon.com/hasumon.html

ロゼッタ

新潮古代美術館1、オリエントの曙光、1980.9.15

仏教に於ける典型的な像は蓮華の上に立つ（坐す）仏だが、これと同じ様相

が、エジプトに於ける蓮の花とパピルスである。（下エジプトはパピルス、上エジプトは蓮が象徴とされた。）つまり、蓮華・蓮の花が陰、仏やパピルスは陽である。蓮華・蓮の花の元はロゼッタで、イナンナのシンボルだが、不老不死の象徴である。

エジプトと仏教の共通性を見ると、仏教では浄めとして香を焚くが、エジプトでも神殿で香を焚いたし、仏教の僧は剃髪するが、エジプトの神官も剃髪した。仏教の祖、釈迦は十支族の中のサカ族だが、十支族のエフライムとマナセはエジプトに売られたヨセフの子たちである。

十支族はサマリア（＝ショムロン、「小さなシュメール」の意）に居てイナンナを最高神としたが、サマリアは地理的にフェニキアの影響が強く、フェニキアはエジプトと深い交流があり（不死鳥フェニックスなどは典型）、フェニキアの神官は剃髪し、神殿では香を焚いた。フェニックスの原型は、“復活”のイナンナである。

ヒンズーでは火葬が主流だが、火葬の大元はフェニキアとも言われ、フェニキアの最高神はイナンナであり、フェニックスはエジプトとフェニキアの間を行き来する。英語のフェニックスに相当するギリシャ語のフォイーニックスは、フェニキア、紫、ナツメヤシの 3 つの意味を持つ。紫はフェニキア特産の貝紫から抽出される赤紫の色素で、フェニキア人はこの貴重な色素で財を築いた。紫が最も高貴な色とされるのは、日本も同じである。ナツメヤシはイナンナの好物であり、中東では「生命の樹」とも言われる。

仏教では仏像など偶像があるが、エジプトではマルドゥクが自分の飛行船の先端を神殿奥に安置し、ベンベンとして拝ませ、偶像崇拝の元となった。

そして、フェニキア暦はユダヤ暦のベースとなったが（ヘブライ語はフェニキア語から分化した）、神道の神宮歴もフェニキア暦がベースである。特に、フェニキアの都市ビュブロスは旧約ではゲバルと呼ばれ、現在のジュバイルだが、パピルスを意味する古代ギリシャ語 ″Byblos″ に由来し、聖書の英語 ″Bible″ は、この都市に因んだものである。ここでもパピルスの登場だが、″Byblos″ はセム族の女神＝イナンナが祀られていたフェニキア最古の古代都市であり、イナンナのシンボルはロゼッタである。

つまり、仏教にはフェニキアやエジプトの影響が見られるが、それも元を辿ればシュメールで、すべてに関わる神はイナンナであることかお分かりだろう。そのシュメール系と思われるアーリア人がインドに侵入し、口頭伝承してきた宗教思想「ヴェーダ」に影響を受けてバラモン教が発生し、その後、土着神を取り込んでヒンズー教となり、叙事詩の成立を経て、ヴィシュヌ派とシヴァ派へと二大宗派化していった。その後、仏教が誕生したのである。

②仏教概要

言うまでも無く、創始者は釈迦で、釈迦は十支族の中のサカ族。原始仏教は哲学的だが、後にヒンズー化して宗教化し、更にバラモン教のカーストの影響を受け、仏のヒエラルキー（階層）が生じた。流れとしては、原始仏教→部派

仏教→上座部、大乗仏教→密教である。以下、主に Wikipedia より。

a：原始仏教

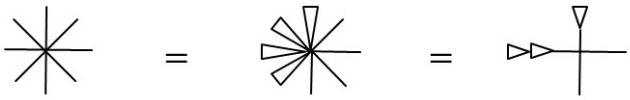
BC450 年頃、ガンジス川中流域で釈迦が提唱して発生した。自然崇拝や民族宗教などの原始宗教をルーツに持たず、同時代の孔子やソクラテスなどの思想家・哲学者と同じく、成熟した文化基盤の下、盲信的な原始的宗教から脱しようとした哲学的思想。

釈迦は、他の苦行などの実践者の主張であるアートマン（真我）の存在を否定して無我とした。釈迦は形骸化したバラモン教を批判し、バラモンが認めていたヴァルナも輪廻転生も否定した。苦行を否定した釈迦が開いた悟りとは、「生命の樹」の真理＝宇宙の真理を知ることに他ならない。以下、釈迦の概要である。

・16 歳で結婚し、一子をもうけるも、29 歳で一切を捨てて出家。
・苦行が無意味であることを悟り、村娘スジャータの捧げる乳粥で体力を回復した後、ブッダガヤにあるアシュヴァッタ樹の下で瞑想し、“明けの明星”が輝く頃、35 歳でついに悟りを開く。
・クシナガラ郊外に、東西南北に 2 本ずつシャーラ（沙羅樹）が生えていた場所で、2 本のシャーラの間に横たわり、80 歳で入滅。

16、明けの明星はいずれもイナンナのシンボル。35 を 3＋5＝8、80 を 8＋0＝8 とするならば、八芒星はニビルと金星＝イナンナのシンボルで、ヤーでもある。また、29＝2＋9＝11 で、隠された“ダアト”＝を含む 11 個のセフィロトの暗示で「生命の樹」そのものだから、29 歳で一切を捨てて出家とは、「生命の樹」＝この世の真理の探究を開始したという意味となる。

粘土板のシンボルと楔型文字

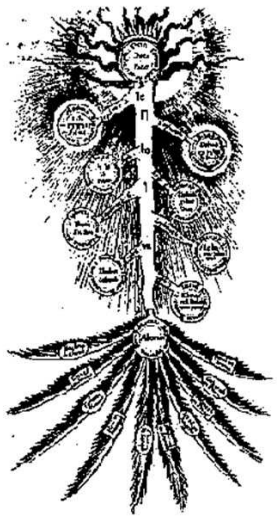


金星（イナンナ、イエス）　天　神
ニビル（アヌ）　十字（ニビル、イエス）

アシュヴァッタ樹（インド菩提樹）は「生命の樹」。シャーラとは、優れた木、堅固な木の意味で、「生命の樹」と「知恵の樹」。2 本のシャーラは両樹の「合わせ鏡」で、それが東西南北ならば 16 本で、やはり知恵の女神イナンナのシンボル。

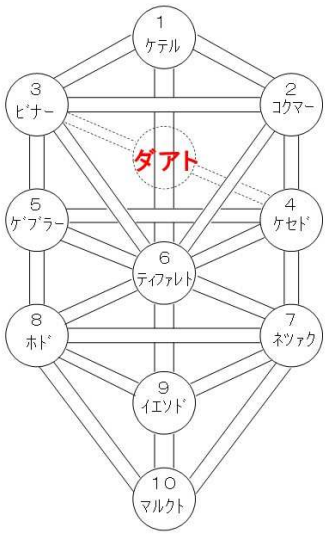
ということで、釈迦は宇宙の真理を悟ったわけである。なお、釈迦が生存中には仏教聖典などは無く、釈迦が没後、弟子たちが編纂した。また、釈迦が説法することを“大法螺を吹く”と言った。

アシュヴァッタ樹



学研NSMブックスエソテリカ宗教書シリーズ
『ヒンドゥー教の本』

生命の樹



峻厳の柱　均衡の柱　慈悲の柱

b：部派仏教

釈迦没後 100 年頃、解釈に異論が生じ、上座部と大衆部の 2 つに大きく分裂した。この時代の仏教が部派仏教で、およそ 20 の部派に分かれた。

c：上座部仏教

上座部仏教では、自ら修行をして真理に目覚め、最終的には「アートマン（永遠に存在する個人の本体＝我）を見つけ出すことはできない（無我）」と悟り、すべての欲や執着を捨てることにより、苦の束縛から解放されること（＝解脱）を求める。この境地を涅槃と言う。つまり、修行によって煩悩から解放されて悟りを得、輪廻の苦から解脱して、涅槃の境地に入ることを目標とする。

d：大乗仏教

上座部仏教では修行者しか救済を得ることができないが、大乗仏教では、他者により救済されることを可能とする。ここから唯識（ゆいしき）派、浄土教、禅宗、天台宗などが派生した。

大乗仏教では、輪廻の中で徳（波羅蜜、はらみ）を積み、阿羅漢（あらかん＝最高の悟りを得た、尊敬や施しを受けるに相応しい聖者）ではなく仏陀となることが究極的な目標とされ、自分だけではなく、苦の中にあるすべての生き物たち（一切衆生）を救済することを目的とする。

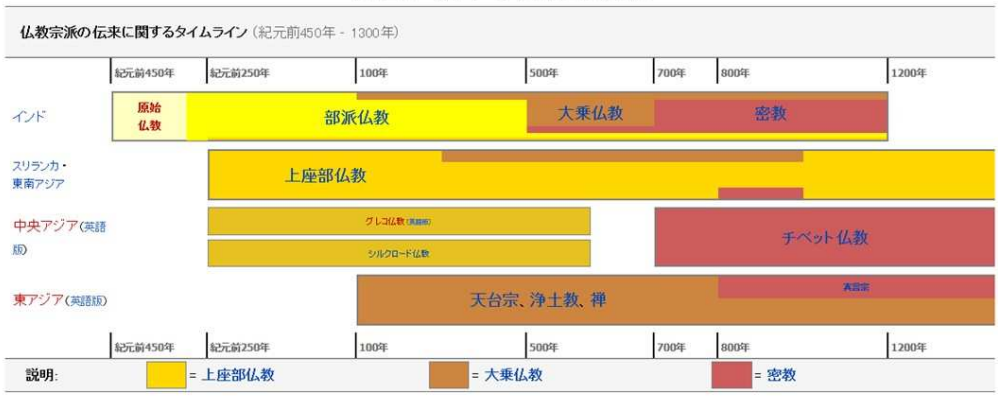
e：密教

勢力を増したヒンズー教のタントラの教義が大乗仏教に取り入れられて、密教となった。密教は、様々な土地の習俗や宗教を包含しながら、それらを仏を中心とした世界観の中に統一し、すべてを高度に象徴化して独自の修行体系を完成し、秘密の儀式によって究竟の境地に達し、仏となること（即身成仏）が

できるとする。
　真言（マントラ）を唱え、手に印契（いんげい）を結び、心に大日如来を思う三密という独特のスタイルをとった。曼荼羅はその世界観を表したものである。門外漢には伝えない秘密の教えなので、密教と言われる。

　仏教は、インドでは段階を追って発展したが、特に支那を経由して以降は、大きく形を変えた。（支那人が都合の良いようにそれぞれ解釈し、解釈後は、元となった経典を破棄したため。）その後、日本に於いては、神仏習合の考えから、更に独自の発展をした。以下、アジア各国に於ける仏教の流れを示す。なお、イナンナを創造神とするヒンズー教、仏教、ペルシャは各宗教で神の善と悪が逆転しているが、それは本質ではなく、いずれも正統性を争ったので、互いに仲が悪かっただけである。

各国に於ける仏教の流れ



Wikipedia

③仏の階層
　ヒンズー教のベースであるバラモン教のカーストの影響を受け、釈迦が望んでいなかったにも関わらず、仏にも階層ができてしまった。以下、仏の階層について。仏には４つの階層があり、高位の階層から順に仏陀（如来）、菩薩、明王、天部である。
（http://sasisusumu.hatenablog.com/entry/2015/05/10/011132）

http://jinsei-c.com/kohro/jinseikoro39/staff/

・仏陀（如来）
　悟りを開き、解脱した存在。釈迦如来、阿弥陀如来、大日如来、薬師如来など。

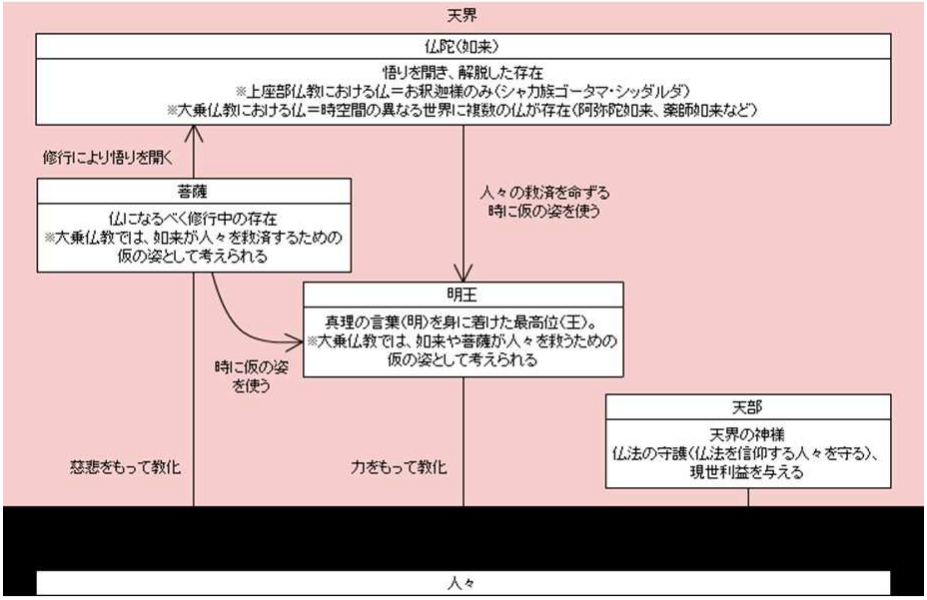
・菩薩
　悟りを開くべく、輪廻転生を繰り返し、修行中の存在。人間界の人々について、主に慈悲によって教化し救済する。観音菩薩、地蔵菩薩、弥勒菩薩、千手観音など。
　本来の意味は、悟りを求める僧＝ボーディ・サットヴァなので、あの世から人間を救う存在ではなかった。

・明王
　如来から命を受け、あるいは如来が姿を借りて、人間界の人々を救済する存在。主に、力によって人々を救済する。不動明王、金剛夜叉明王など。

・天部
　天界における神々。仏教を信仰する人々を外敵から守り、利益を与える存在。梵天、帝釈天、弁財天、大黒天、毘沙門天など。

　これらは様々な土地の習俗や宗教に影響された結果であり、それらの神々が習合されている形でもある。その神々の原型は、いずれもアヌンナキである。例えば、帝釈天はバラモン教、ヒンズー教、ゾロアスター教、ヒッタイトなどのインドラであり、原型はトルコ付近の雷神イシュクルである。

天界、仏、人々の関係



http://sasisusumu.hatenablog.com/entry/2015/05/10/011132

4：神仏習合

ここまででインダス文明の哲学を引き継ぐ仏教の流れや概要、また、神仏習合の本質とは、起源意識を大元のエネルギーとするエネルギー分化の象徴であることもお分かりいただけたことと思う。それでは、日本の神と外来の仏が習合された真意について、改めて考察しよう。

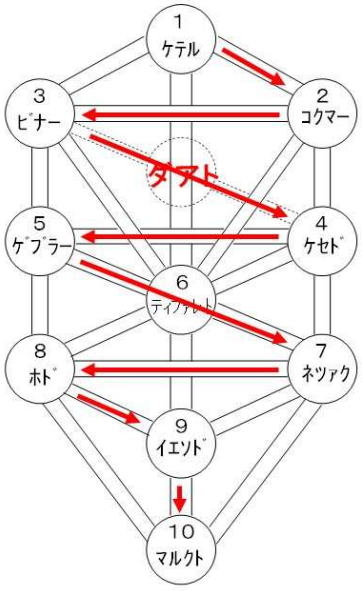
(1)宇宙の真理

釈迦は宇宙の真理を悟ったが、その教えがいつの間にか人々の救済に変化し、アヌンナキが原型の、様々な土地の習俗や宗教の神々が取り入れられ、釈迦が望んでもいなかった仏の階層ができてしまった。

しかしながら、インドの原始タントラでは、“永遠に存在する個人の本体＝我＝アートマン”と“宇宙の根本原理＝梵＝ブラフマン”は究極的に一体であり、一体化させるのが人間の生きる目的であり、それを“梵我一如”と言い、“悟りの境地”としていたので、元々は宇宙の真理もおぼろげながら理解していたに違いない。神仏習合を創り出した人たちは、それを知っていたのだろう。だから、発祥国には無い独自の仏が登場したり、発祥国とは異なった解釈が、日本に於いては成されたのである。成されたというよりも、あるべき姿に近づけるように修正された、とでも言うべきか。

では、神仏習合とは何か？ここまで見てきたように、神の本質はエネルギーであり、創造のエネルギー＝起源意識から黄金分割によってエネルギーが凝縮して宇宙という器が誕生し、そこに順次、物質や生命が発生した。このエネルギー分化の各段階が“本来の神々”である。段階こそ違え、いずれも神であることに変わりなく、役割が異なる、とでも言うべきだろう。

生命の樹とエネルギー



峻厳の柱　均衡の柱　慈悲の柱

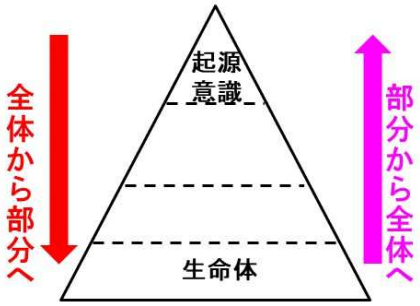
エネルギー分化の段階は仏の階層の如きだが、上が高級、下が低俗、などということではなく、上と下が相まって宇宙が構成されている、ということである。「生命の樹」で言えば、上からエネルギーが降下・分化して生命体（人間）となり（赤矢印）、人間が進化して上昇し神の域に達する（赤矢印とは逆方向）。

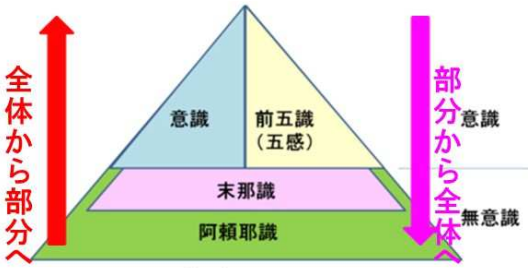
つまり、あらゆるものには神が宿っており、神の分化＝部分であって、かつ、神を構成する全体でもある。（＝眞名井、和多志。）エネルギー主体としての起源意識は同時に、そこから最初に分化した物質宇宙（客体）でもあり、客体は主体からエネルギー供給されて存在し、主体は客体から情報をフィードバックされて進化し得る。情報をフィードバックする客体のメインは生命体、とりわけ高等生命体の人類である。この相互作用があってこそ、宇宙は成り立つ。

大乗仏教の見解の 1 つに“唯識”があるが、唯識

とは、各個人にとってのあらゆる諸存在が、唯（ただ）、8 種類の「識」によって成り立っているという。(Wikipedia) その 8 種類の「識」とは、いわゆる五感である「前五識」、自覚的意識である「第六意識」、自分に執着し続ける心の潜在意識である「末那識（まなしき）」、そして、これらの根本と考えられる「阿頼耶識（あらやしき）」である。この阿頼耶識が各識と身体、そして、“世界”を生み出していると考える。

大乗仏教では、人間の思考・行動は阿頼耶識に記録され、阿頼耶識は各識に影響を及ぼし、各識の転変は一瞬のうちに生滅を繰り返し、その瞬間が終わると過去に消えると考える。すなわち、すべての「物、識＝色」と思われているものは“現象”でしかなく“空（くう）”であり、実体の無いものと考える。このように、般若心経に登場する“色即是空”を捉えた。つまり、阿頼耶識は起源意識のことに他ならない。





八識の概念図(Wikipedia)

この各層に、人類に対して神々として振る舞ったアヌンナキを原型とした神々が当てはめられた。その当てはめ方の法則として、カバラが利用されたのである。大宇宙の縮図である人体をモデルとした「生命の樹」、宇宙構造のモデルであるメビウスの帯の鏡像関係を示唆する「合わせ鏡」としての鏡像反転、そして、象徴及びその重ね合わせである。では、次にカバラについて改めて見てみよう。

(2) カバラ

カバラとは、神界に至る知恵とされるが、簡単に言えば、神々の謎を解く鍵である。1 つは、大宇宙の縮図である人体をモデルとした「生命の樹」。1 つは、宇宙構造のモデルであるメビウスの帯の鏡像関係で、これは「合わせ鏡」としての鏡像反転である。そして、もう 1 つが、象徴及びその重ね合わせである。象徴とは図像、記号、数字、名称、性質等である。「生命の樹」と「合わせ鏡」が宇宙の構造由来であるのに対して、象徴及びその重ね合わせは人為的側面が大きい。

①生命の樹

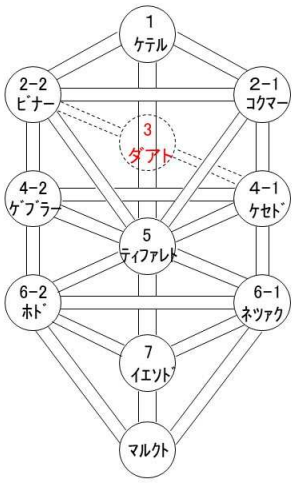
「生命の樹」は均衡の柱、慈悲の柱、峻厳の柱の 3 本柱で構成され、柱は神の数え方なので、「生命の樹」は三神を暗示する。これらは、それぞれ入れ替え

ることができる。各セフィラは人体に対応し、後ろを向いた神アダム・カドモンの姿とされる。

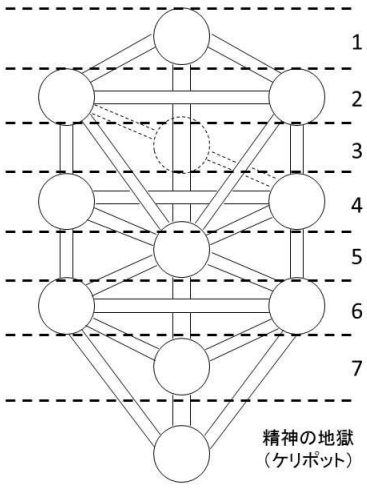
均衡の柱は最も重要だが、普段はあまり登場しない神とされ、普段最も関わりの深い神は慈悲の柱である。御魂で言えば、和魂（にぎみたま）である。厳しさや荒々しさ、活動的な側面＝荒魂（あらみたま）は、峻厳の柱である。

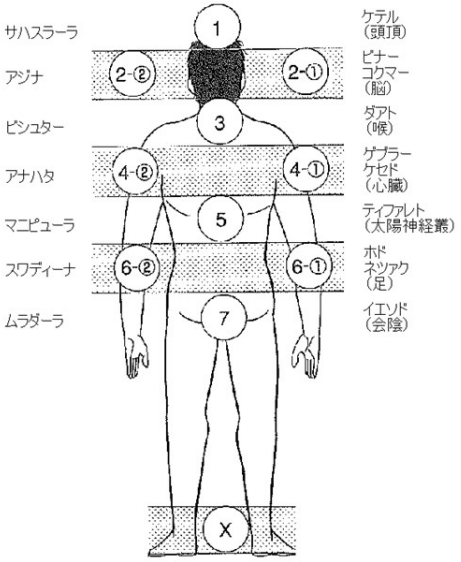
左手よりも右手が重要とされるのは、アダム・カドモンが後ろ向きで、慈悲の柱が右手の陽に相当するからである。後ろ向きなのは、将来、降臨して人々の前に御姿を現すまで姿を見せないということの暗示である。なお、最高神が女神の場合、「合わせ鏡」の原理によってアダム・カドモンは前向きとなる。

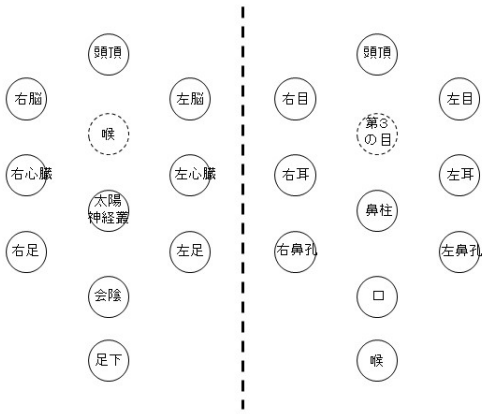
従って、通常は向かって右が重要あるいは陽となる。なお、各セフィラを中心に集めたものが人体チャクラであることは、前述のとおりである。ここに、それを示す。



峻厳の柱　均衡の柱　慈悲の柱







②合わせ鏡

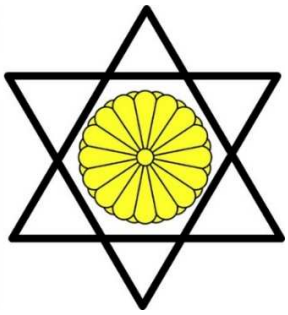
『元伊勢の秘宝と国宝海部氏系図　増補版』
（村田正志監修、海部光彦編著、元伊勢籠神社社務所、1996）

「合わせ鏡」としての鏡像反転は文字通り、反対の性質に転換することである。例えば、男を女に、和魂を荒魂に。また、配置を鏡像反転する場合もある。合わせ鏡は、向かい合わせに配置した 2 枚の鏡である。鏡に映った鏡の中に鏡が写り、その中にまた鏡が写る、という具合に、無限を思わせる枚数の鏡が映ることになり（実際は有限）、神々の永遠（＝常若）、人類の長寿などを意味する。その元となっている鏡は、伊勢の元である籠神社で、宮司が代々手渡しで継承してきた息津（おきつ）鏡・辺津（へつ）鏡であり、先祖の卑弥呼が神事で使い始めた鏡で、八咫鏡のオリジナルである。

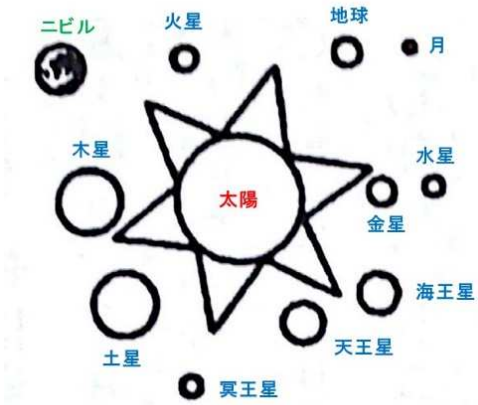
なお、インダスでは創造神が女神（イナンナ）のため、アダム・カドモンは前を向いていて左右逆だが、これは「合わせ鏡」の例である。

③象徴及びその重ね合わせ

象徴及びその重ね合わせの理解はややこしい。まずは、六芒星と十六弁八重表菊紋を例としよう。



シュメールの粘土板に記された太陽系



「人類を創成した宇宙人」（ゼカリア・シッチン、徳間書店）

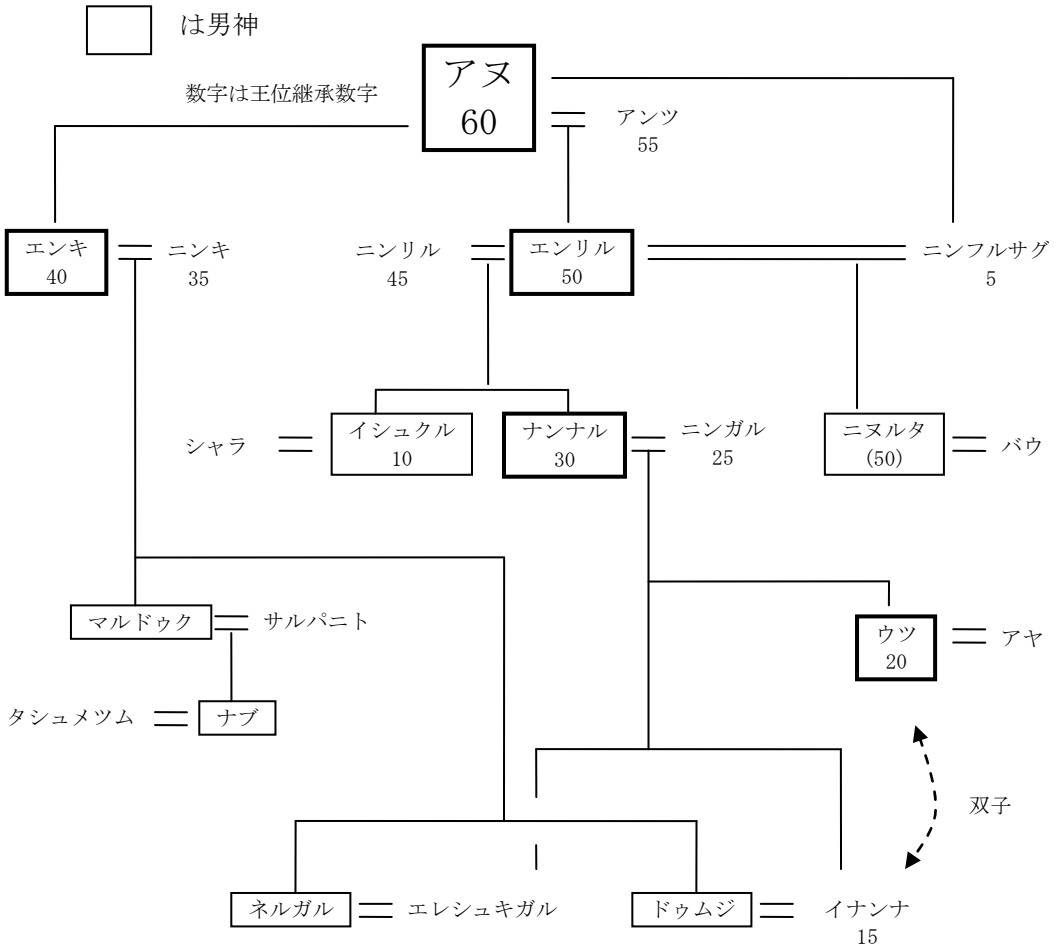
太陽は六芒星で象徴され、太陽神ウツのシンボルでもある。この場合、図像は太陽、記号は六芒星、数字は 6、神の名称はウツである。太陽神だから、天照大神を祀る内宮の神に相応しい。

十六弁八重表菊紋の原型はロゼッタ（薔薇）で、豊穣の女神イナンナのシンボルである。豊穣神だから、豊受大神を祀る外宮の神に相応しい。

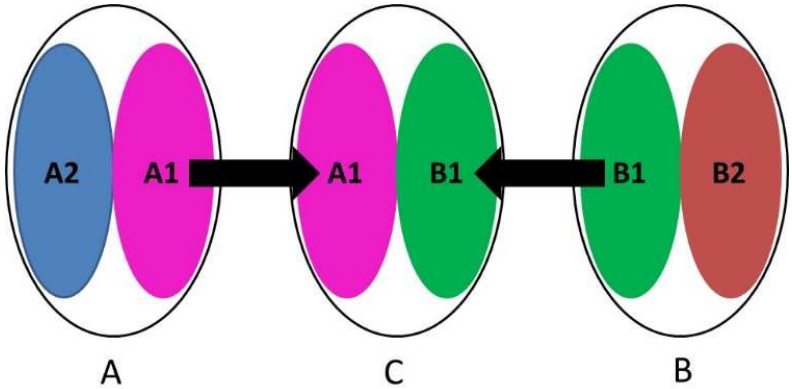
ウツとイナンナは双子だから、カバラとしては性質として一心同体と見なせる。これが、外宮と内宮が表裏一体、ということである。

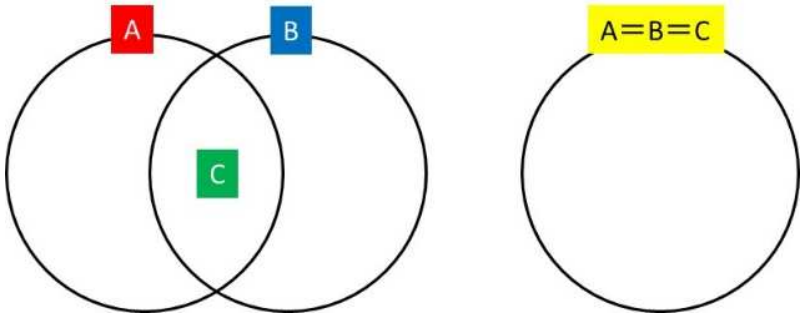
豊受大神を祀る大元の宮、籠神社の眞名井神社は与謝宮とも言われ、シリウスの和名の 1 つが与謝星であり、内宮に先立って外宮で神事が斎行されることは、太陽に影響を与えているのは太陽を生み出したシリウス星系、ということを暗示しているカバラである。

また、王位継承数字はウツが 20、イナンナが 15 である。妻は夫よりも 5 小さい数字というのが、ニビルの法である。すると、王位継承数字的には、ウツとイナンナは夫婦と見なせる。これなどは、数字のカバラである。



次に、性質としての一例を示す。A、B、C は人物あるいは神とする。A の性格の側面には A1 と A2 があり（例えば優しさと厳しさ）、B の性格の側面には B1 と B2 があるとする。A の側面 A1 と、B の側面 B1 を取り出し、架空の人物として C を創作した場合はどうなるか？表面的には、A＝C、B＝C だから、A＝B＝C になりそうだが、そうではない。これを、A＝B＝C と見てしまうと、混乱が起きる。





重ね合わせで気を付けるべきは、ある側面が一致しているからといって、すべてが一致して同一、と見なしてしまうことである。それにより、神話や伝承が理解できなくなる。元はと言えば、マルドゥクが他の神々の権威を一手にし、すべての神々の上に君臨しようとしたことにある。（＝あらゆる神々の性質が 1 つに集約されてしまった。）これまで、同一と見なせる、などとしてきたのは、ある側面の性質が一致していることをそのように見なす、という意味である。

カバラの考案者は、父エンキと共に人類創成に携わり、世界中のピラミッドやストーンサークルを設計した天才科学者ニンギシュジッダである。彼のシンボルは、DNA に因んで 2 匹の蛇である。（父エンキは 1 匹の蛇。）他の呼び名はトート、ケツァルコアトル、猿田彦大神などだが、これなどは“神仏習合”ではなく“神々習合”とも言えるだろう。他には、イナンナ＝豊受大神＝ヴィーナス＝アフロディーテ、エンキ＝大山祇神＝ポセイドン＝プタハ、等々の例がある。

流水の壺を持つ水神エンキ（右）にグデア王の個人神
ニンギシュジッダ（中）がグデア王（左）を紹介する場面
（グデア王の円筒印章印影図）

グデア王　ニンギシュジッダ　エンキ

集英社『文明のあけぼの』、三笠宮崇仁

カドゥケウスの杖　　カドゥケウス（中心）と怪獣ムシュフシュ（両脇）

Wikipedia

集英社『文明のあけぼの』、三笠宮崇仁

④ヒンズーの神々

ブラフマー　ヴィシュヌ　シヴァ

学研NSMブックスエソテリカ宗教書シリーズ
「ヒンドゥー教の本」

重ね合わせの逆は、分化・分身・化身であり、宇宙のエネルギー分化でもある。化身が頻繁に登場するのが、知恵の女神イナンナが創造神であるヒンズーの神々である。

この図では、本来中心に位置するべき創造神ブラフマーがヴィシュヌと入れ替わっているが、前述のように、「生命の樹」の 3 本柱は、それぞれ入れ替えることができる例である。各柱との対応は次の通り。

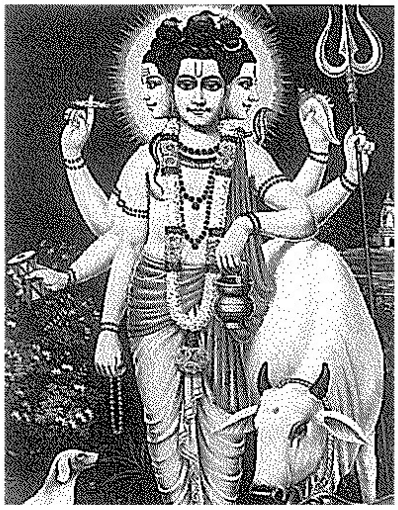
・均衡：ブラフマー、慈悲：ヴィシュヌ、峻厳：シヴァ。

さて、最も化身が多いのはヴィシュヌなので、ヴィシュヌを例にしよう。ヴィシュヌの化身にはラーマ、クリシュナ、マツヤ（魚）、クールマ（亀）、ヴァラーハ（猪）、ヌリシンハ（人獅子）、ヴァーマナ（矮人）、斧を持つラーマ、ブッダ、カルキがある。各化身の詳細は割愛するが、ヴィシュヌが慈悲の柱であり、魚や亀が登場することか

ら、これらをシンボルとするエンキが大元のモデルである。特にクリシュナはインドで最も親しまれ、愛されている神で、イエスの逸話と類似している。イエスの父はエンキなので（＜神々の真相 5＞）、やはりエンキと関わりが深い。（クリシュナはBC7世紀頃に活躍した実在の人物。）

そして、クリシュナは16,000の分身を創った神とされている。16は十六弁八重表菊紋＝ロゼッタだからイナンナの暗示で、イエスの様々な逸話の原型はイナンナだから、インダスの創造神イナンナも重ね合わされている。

ダッタトレーヤ



学研NSMブックスエソテリカ宗教書シリーズ
「ヒンドゥー教の本」

インダスの創造神はブラフマーであり、イナンナの性質はシヴァに最も反映されていることから、三神は同一としても表される。ブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァが合体したのが、ダッタトレーヤである。

このような化身の考えが、神道では御魂分け（＊）となり、また、同じような性質を有する別名の神になったりしている。

＊御魂分け

ある神の御霊を分け、他の場所に勧請すること。例えば、お稲荷さんは伏見稲荷神社から、八幡さまは宇佐神宮及び石清水八幡宮から、というように。これにより、全国にはコンビニの数を超える神社がある。

(3)神仏習合の例

神仏習合が宇宙の真理とカバラ由来であることが分かったところで、具体例を示す。

・例1：天御中主神

エネルギーとしては起源意識。仏としては妙見菩薩。

インドに発祥した菩薩信仰が道教の北極星信仰と習合し、仏教の天部と化したのが妙見菩薩である。星宿信仰に道教、密教、陰陽道などの要素が混交している。道教では、北極星（北辰）は天帝（天皇大帝）と見なされ、妙見とは“優れた視力”の意味で、善悪や真理を良く見通す者、ということである。すなわち、“すべてを見通す目”！シンボルで言えば一つ巴であり、やはり起源意識。また、天帝＝北極星の守護が北斗七星で、北斗七星は小宇宙たる人体と大宇宙を結ぶものであり、結局、北極星が大宇宙＝起源意識を暗示することから、天御中主神との習合となる。

シュメールの神々としては、最高神アヌ。また、“すべてを見通す目”ということからすれば、“ニニギク、ニンイギク（目の清い神）”と言われた地球の主エンキでもある。（＜神々の真相 1＞）また、ユーフラテス川中流の西岸にあった古代シュメール及びアムル人の都市国家マリでは太陽神シャマシュ（ウツ）

がすべてを見通す全能の神として知られていた（＜神々の真相 5＞）ので、ウツでもある。

・例 2：瀬織津姫
　エネルギーや天体としては起源意識、シリウス。起源意識ということでは、インダスの最高神ブラフマーが自ら生み出した（＝化身）妃サラスヴァティーで、仏教では弁財天とされる。
　リグ・ヴェーダの中では最高の母とされるので、シュメールの神ではニンフルサグである。川の女神という点では、水神の根源エンキの「合わせ鏡」と、「生命の水」で蘇ったイナンナであり、両者の重なりによりシリウスとなる。（＜星の信仰－太陽信仰の本質＞）
　また、水に関わる水天宮で天御中主神が祀られていることから、起源意識でもある。ここに、シリウスと起源意識の重なりが出てくるが、それは S 極系エーテル繊維という共通点故でもあり、そういう点ではシリウス B である。

　弁財天は蛇神の宇賀神＝宇迦之御魂神と習合し、宇迦之御魂神＝豊受大神＝イナンナで、蛇神の原型はエンキだから、エンキとイナンナの重なりによりシリウスとなる。
　瀬織津姫は天照大神荒魂とされるが、極秘伝では豊受大神の和魂で、豊受大神を祀る籠神社の奥宮、眞名井神社の別名は与謝宮で、シリウスの和名の 1 つが与謝星だから、天照大神荒魂はシリウスである。
　また、豊受大神の亦名は天御中主神だから起源意識だが、更に国常立神とも言われるので、大地母神イナンナである。
　イナンナのシンボルはロゼッタで、十六花弁八重表菊紋の大元であり、イナンナの冥界下りがイザナギの冥界下りの原型で、（死という）穢れを祓う菊理姫ともなる。この場合、イナンナは“復活”したから、肉眼で見えるシリウス A である。

・例 3：五大明王と愛染明王（ベースは主に Wikipedia）

五大明王

愛染明王

Wikipedia

五大明王とは、中心に不動明王を配し、東に降三世（ゴウザンゼ）明王、南に軍荼利（グンダリ）明王、西に大威徳（ダイイトク）明王、北に金剛夜叉（コンゴウヤシャ）明王を配する。（台密系では、北方は烏枢沙摩（ウスサマ）明王。）

ここで、中心と南北に注目する。中心の不動明王は＜星の信仰－太陽信仰の本質＞に記載されているようにシリウスの暗示で、エンキとイナンナの重なりである。

南の軍荼利明王はその名の通り、クンダリーニの暗示で、金剛界曼荼羅では甘露軍荼利＝アムリタ・クンダリンであり、アムリタは不死の妙薬だからイナンナの暗示、クンダリンは水瓶やとぐろを巻いた蛇だからエンキの暗示である。

金剛夜叉明王は古代インド神話のヴァジュラヤクシャ神で、雷（＝金剛杵）を武器とする、聖なる力を持つ神である。雷は雷神イシュクルのシンボルで、帝釈天＝インドラであり、ギリシャでは最高神ゼウスである。これは、「生命の樹」の頂上から放たれる稲妻でもある。北を「生命の樹」の上、南を下とみるならば、不動明王は中心のダアトやティファレトに相当し、宇宙のエネルギーが稲妻（稲妻＝雷＝神成り）のように降下して人体に入り、人体からクンダリーニが上昇して宇宙と一体となる、ということ。エネルギーの稲妻のような降下とは、起源意識から物質宇宙に流出する、S 極系エーテル繊維エネルギーのことである。（24 ページ「生命の樹とエネルギー」の図。）従って、金剛夜叉明王は天御中主神にも相当する起源意識で、軍荼利明王は地球とも言える。

烏枢沙摩明王の場合では火神アグニとなるが、軍荼利明王の水瓶の性質と合わせて、火水＝カミ＝神。

すなわち、北－中心－南が均衡の柱、東が慈悲の柱、西が峻厳の柱となり、シリウスを中心とした宇宙を貫く「生命の樹」の暗示である。

愛染明王は、頭上に獅子の冠を頂き、紅蓮の蓮華座に座す。獅子はイナンナが従えており、紅蓮は赤いロゼッタ（薔薇）でイナンナのシンボル。愛染明王の密号は離愛金剛で、“愛欲を離れて大欲に変化せしむ”意味だが、愛を昇華して宇宙と呼応する性愛の秘儀だからイナンナである。

特徴は、智慧の弓と方便の矢をもって衆生に愛と尊敬の心を与えて幸運を授け、性に善き愛を与えて良い縁を結び、女性の出産の苦しみを和らげ、愛欲を否定しないことから、知恵と愛の女神イナンナである。

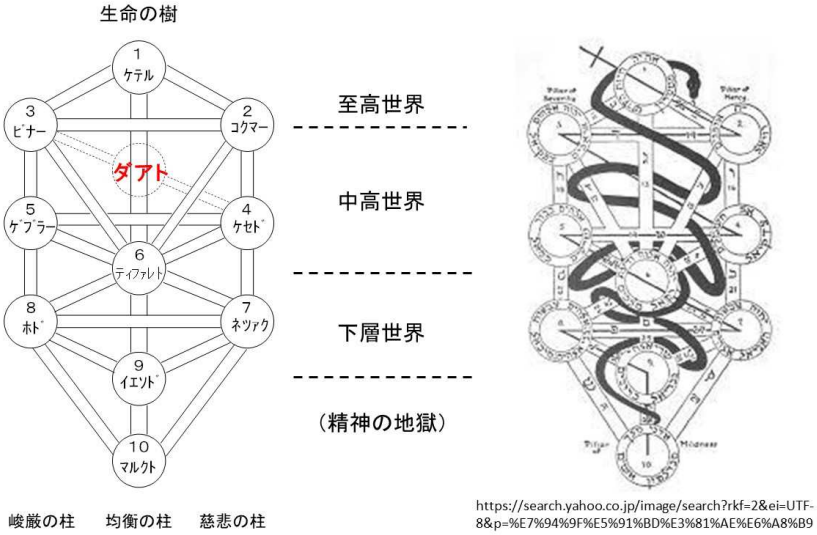
エンキもまた、女好きな性愛の男神であり、知恵の神としての根源である。

また、不動明王と共に祀られる場合、イナンナは木に掛けられて瀕死となり、復活した知恵の女神だから、「知恵の樹」に絡まる蛇でもある。

そして、不動明王は前述のように「生命の樹」だが、「生命の樹」にも蛇が絡まり、その原型は蛇神エンキである。

すなわち、不動明王と愛染明王の対で、「生命の樹」と「知恵の樹」の「合わせ鏡」となる。また、不動明王はシリウスの暗示で、愛染明王はイナンナだから金星の暗示。そして、両者合体してシリウスの暗示だが、両者の間に大日如来（＝太陽）が祀られるならば、大元の光で宇宙を遍く照らす起源意識の光でもある。これほどシリウスと金星が関わりあうならば、共に S 極系エーテル繊

維エネルギーが流れ込む、エネルギーポータルなのかもしれない。（空海が金星を飲み込んだ真意！？）



(4)まとめ

ややこしいが、簡単にまとめると次のようになる。

エネルギー分化の各段階に、星々やアヌンナキを原型とした神々を当てはめた。また、元の教えから離れてしまった仏教を、あるべき姿に近づけるようにアレンジし、これまたアヌンナキを原型とした仏を当てはめた。これが、神仏習合の真意である。

結局、エネルギー分化の各段階を神、仏と言い、人間の姿形をした神や仏はアヌンナキを原型としたモデルにすぎない。アヌンナキをモデルとしたのは、かつては神殿でアヌンナキを神々として崇め、彼らに長寿や繁栄などを祈願するようにさせられたからである。そのアヌンナキも、彼らの星＝ニビルの神殿では起源意識を“万物の創造主”として祀っていたのである。

5：修験道

修験道は神仏習合の神髄でもあるので、ここからは修験道について。

(1)修験道概要（Wikipedia）

山に籠もって厳しい修行を行うことにより、功徳のしるしである験力を得て、衆生の救済を目指す、神仏習合による日本独自の山岳信仰。熊野三山、白山、出羽三山などが有名な霊山である。

修験道の実践者を、修験者または山伏と言う。奈良時代の伝説的な人物、役小角（エンノオヅノ）が創始したとされる。

江戸時代には、醍醐寺三宝院を中心とする真言宗系の当山派と、聖護院を中心とする天台宗系の本山派に分けられた。明治の神仏判然令により、修験道は

禁止されたものの、修験道は民衆との結びつきが強かったことから、今日まで脈々と続いている。
　修験道独自の神としては、蔵王権現、愛宕権現、若一王子（ニャクイチオウジ）、九十九王子（クジュウクオウジ）、前鬼・後鬼（ゼンキ・ゴキ）、一言主神（元は賀茂氏の祖神）、天狗など。

(2)修験道詳細
①役小角
　役氏は三輪氏族に属する地祇系氏族で、加茂氏（賀茂氏）から出た氏族とされる。つまり、大和朝廷の重要氏族なわけだが、弥生海人の海部氏から原始キリスト教徒の秦氏への王権委譲により大和朝廷が成立したので、役小角は表向き、秦氏である。
　出身地は葛城上郡で、葛城一帯は海部氏系の尾張氏と、海部氏と婚姻関係にある出雲系の葛城氏とが協力して祭祀を行っていた場所で、父方が出雲出身とされるのは賀茂フラージュである。

　役小角は様々な山で修行したとされるが、縄文時代より山は聖地であり、誰もが入れるわけではなかった。縄文海人の中で山の民となった一族の認可が必要で、彼らの助け無しに入山は不可能だった。また、役小角は前鬼・後鬼という鬼の夫婦を従えていたが、鬼は封印された海人一族の暗示である。よって、役小角の裏の顔は、縄文海人である。熊野や白山、出羽三山などは、代表的な縄文系である。

②山伏の姿
　頭巾（ときん）を頭に着け、独特のいでたち。

https://kotobank.jp/word/%E5%B1%B1%E4%BC%8F-144308

ユダヤ教徒は祈る時にヒラクテリーという、旧約聖書の言葉を収めた黒い小箱を額に着け、ショーファールという羊の角で作った笛を吹く。

山伏は頭巾を着け、法螺貝を吹く。山伏の格好をした天狗は虎の巻を持っているが、ヘブライ人はシナイ山で神からトーラーの巻き物を授かった。ということで、このいでたちはユダヤ由来である。原始キリスト教徒の秦氏はユダヤ人で、縄文海人の助けを借りたが、原始キリスト教とは本来のユダヤ教のことで、エゴで歪んだ教えをイエスが正した。

http://inri.client.jp/hexagon/floorA3F_hb/a3fhb010.html

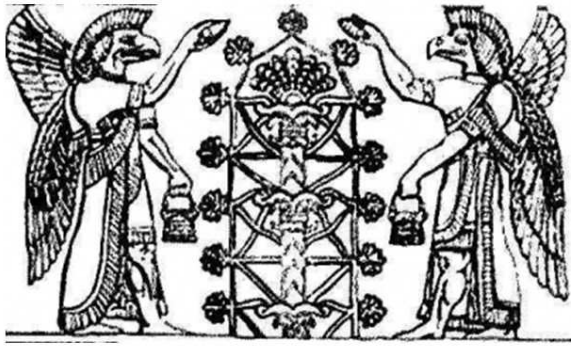
③修験道独自の神

ここでは、天狗と九十九王子、蔵王権現を。まず、天狗は修験者の姿そのものだが、赤ら顔に長い鼻で、ユダヤ人の顔。しかし、それはまた猿田彦大神の顔でもあり、環太平洋文明圏を築かせたニンギシュジッダの暗示である。そして、古代四川にあった古蜀（こしょく）文化の羽人（うじん）でもある。羽人の原型は、鷲の姿をしたアヌンナキである。

羽人

https://search.yahoo.co.jp/image/search?rkf=2&ei=UTF-8&gdr=1&p=%E4%B8%89%E6%98%9F%E5%A0%86+%E7%BE%BD%E4%BA%BA

生命の樹に水を捧げる鷲人間



「人類を創成した宇宙人」（ゼカリア・シッチン、徳間書店）

＜縄文海人（あま）と弥生海人＞に記載されているように、エンキを最高神とする古蜀の流れを汲む一族が支那に広がり、夏王朝を創立した。その一部が縄文日本に渡来して縄文王家となった。夏王朝の始祖とされるのは禹（ウ）だが、黄河の治水事業で功績を成し、“禹”という文字は蜥蜴や鰐・竜の姿を描いた象形文字なので、エンキを祀っていた暗示である。そして、「禹＝ウ」という読みは「烏＝う」に通じ、羽人をも考慮すれば、烏天狗＝八咫烏の大元もまた、この古蜀の流れを汲む一族＝縄文海人由来である。

次に、九十九王子だが、99＝100－1。100 を漢字で書くと“百”だから、そこから“一”を抜くと“白”。すなわち、九十九王子とは“白王子＝皇子”のことで、表の皇子ではなく、國體を護ってきた裏の皇子、つまり、縄文海人系の皇子である。

蔵王権現は、修験道の本尊である。日本独自の仏で、奈良県吉野の金峯山寺本堂（蔵王堂）の本尊。究極不滅の真理を体現し、あらゆるものを司る王とされる。釈迦如来（過去）、千手観音（現在）、弥勒菩薩（未来）の三尊の合体したものとされる。

神道に於いては、大己貴命、少彦名命、国常立尊、日本武尊、金山毘古命等と習合し、同一視された。大己貴命、少彦名命は国造りの神。日本武尊は国を平定し、シンボルは草薙神剣。金山毘古命は製鉄の神で、やはり鉄剣に関わる。つまり、習合された神々は国造りの神々であり、その根本が国常立尊である。

過去・現在・未来に渡り、不滅の真理であらゆるものを司り、国常立尊と習合されたのであれば、その本質はやはり国常立尊であり、地球のエネルギーである。つまり、地球の主エンキであり、国常立尊は封印された艮金神でもあるからイナンナで、エンキとイナンナが重なり、シリウスでもある。

そして、吉野は縄文海人の土地で、この寺は秦氏系だから、ここでも原始キリスト教徒を裏から支える縄文海人、という構造が見える。

④山

石鎚山などは、山そのものが石鎚蔵王権現とされる。特定の山は聖地とされるが、何故なのか？

ウルのジグラット

https://sumally.com/p/2055737

1つは、古代、アヌンナキが階段状ピラミッドのジグラットを降臨場所としたからである。ジグラットやピラミッドの場所はどこでも良いわけではなく、地球のエネルギースポットに相当するような場所である。そこから、カバラとして、降臨する神が陽、ジグラットやその形状が似ている山が陰とされ、陰陽の合一と見なされた。だから、山は陰である女神とされる。（従って、エジプトのピラミッドは断じて墓ではない。）

もう1つは、こちらこそ本質なのだが、エネルギー体としての山である。世界中で聖地とされる山のほとんどは、かつて海底が隆起したものであり、その証拠として、貝殻などの化石が見られる。アルプス、ヒマラヤ、アンデス、そして日本の山岳地帯など。隆起の原因は大きく分けて3通りあり、岩盤の衝突、巨大な圧力による褶曲、巨大カルデラ噴火である。（敢えて、プレートとは言わず、岩盤とする。）

衝突の例としては、インド亜大陸がアジア大陸に衝突して隆起したヒマラヤ山脈（それによりデカン高原では多量のマグマが噴出）、伊豆半島が日本列島に衝突して噴火した富士山、などである。

褶曲の例は、日本列島はアジア大陸から離れ、その後、巨大な圧力で弓型に曲がり、その圧力が原因で列島中央から東北にかけて形成された褶曲山脈である。

そして、九州から東海地方にかけての太平洋沿岸では、巨大カルデラが次々と噴火していくつもの山ができた。巨大なマグマ溜まりの地上に近い部分が冷えて、固まって花崗岩となった。そして、液状マグマとの密度差によって隆起し、それと共に大地が隆起して山となったのである。これらの山の多くの地下は花崗岩、地上は噴出したマグマで焼けた火砕岩である。中には、宮崎の大崩山などのように、花崗岩そのものが地上に隆起したものもある。

巨大カルデラ群

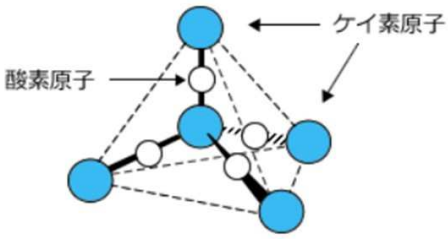
NHKスペシャル　列島誕生　ジオ・ジャパン

つまり、聖地とされる山の地下には褶曲やマグマなどの地殻エネルギーが集中しており、巨大カルデラには巨大なマグマ溜まりがある。特に、巨大カルデ

ラ群に属する石鎚山、吉野～熊野は修験の聖地中の聖地だが、それらの地下には巨大なマグマ溜まりが存在している。

宇宙的なエネルギーの流れとしては起源意識・シリウス→太陽→地球であり、地球上では龍脈・龍穴となり、地球表面や内部で様々な現象を引き起こすが、マグマは物質として顕現したエネルギー的動脈に相当する。（そこから発生した地表の水は、地球の静脈に相当。）

マグマの主成分のケイ酸塩鉱物＝シリカは正四面体構造を取り、物質宇宙の四面体構造と呼応して負の S 極系エーテルエネルギーを媒介し、シリウスからの負のエネルギーが太陽を経て直接的に作用して、マグマを動かしている。



http://www.sidaiigakubu.com/examination-measure/chemistry/09/

この負のエネルギーは、起源意識由来の S 極系エーテルエネルギーである。だから、世界中で火山は畏れられるだけではなく、神として祀られている。ハワイのフラなどは神々に捧げる祈りの踊りだが、中でも火山の女神ペレに捧げるフラは力強く情熱的で、ペレはフラの守護神ともされる。

このように、山には負の S 極系エーテルエネルギーが作用しているので、陰陽で言えば陰となり、女神となる。妻のことを“山の神”とも言うのは、“ウチのカミさん”は“女神さん”だからに他ならない！

そして、女性はすべてを生み出す起源意識と、生命を生み出す子宮を通じて直に S 極系エーテル繊維＝負のエーテルエネルギーに繋がっているから、山に入って修行する必要は無い。男性の体内に眠っている S 極磁気単極子を、負のエーテルエネルギーの強い場所で共鳴させ、活性化する。そのために、女神の胎内たる山に籠るのである。山の中で男根を山の女神に晒すマタギの習慣や、かつては元服を迎えた男子が股間を曝け出していた鞍馬の火祭りなど、いずれも女神に捧げる意味があるが、本質は S 極系エーテル繊維（エネルギー）に共鳴することなのである。

そして、マグマは地球の活動のエネルギーであり、国常立尊として喩えられる。カバラ的には地球の主エンキであり、国常立尊は封印された艮金神でもあるからイナンナで、エンキとイナンナが重なり、シリウスからのエネルギーでもある。そして、この根源のエネルギーは起源意識であり、それを国常立尊＝豊受大神＝天御中主神というカバラとして暗示している。

(3)修験の修行

修験者は、山で厳しい苦行を成す。その本質は、体内に眠っている S 極磁気単極子を負のエーテルエネルギーの強い場所で共鳴させ、活性化することにある。(本来は。)

このために、肉体を極限状態に追い込み、煩悩＝我欲＝エゴを取り払うことにより、神や仏を観て、あるいは声を聴いて悟るとされる。

しかし、このような極限状態に於いては、幻覚を見ることが極めて多い。その幻覚には、いわゆる魔やサタンがある。これらは元々存在していなかったが、人間のエゴから発生した意識エネルギーの産物＝エンティティで、共鳴しやすい人に取り憑く傾向がある。(ヒトラーにも憑りついた。) 聖書にもあるように、サタンは神の如く振る舞う。従って、強靭な意志と十分な知識が無ければ、魔やサタンと、神仏の区別はできない。神仏だと思っていたのが、実はサタン的エネルギー体で、最後は堕とされてしまう。そこが、いわゆる苦行の落とし穴で、釈迦はそれを悟り、苦行を否定したのである。

また、厳しい苦行を達成し得た時は、他では得難い満足感はあるものの、そこから先が無くなってしまうと、無意味に終わる。つまり、達成したという自己満足で終わってしまっては、単なるエゴなのである。

古代以来のシャーマンの中には、幻覚剤を使う場合もある。その場合、使う前には徹底した禁欲生活と、使用に際しては厳格な使用量が定められ、専門のシャーマン以外、使うことは許されない。

従って、単なる苦行は意味を成さず、それどころか、誤った道を進む事にも成り得るので、強靭な精神力と共に、十分な知識を兼ね備えることが、真の修行となる。

肉体的な修行には、ハタ・ヨーガなどがあるが、それとても肉体的・精神的恍惚状態をもって真理の悟りと勘違いしてしまうことが問題である。クンダリーニの活性化にしても、同様である。

(4)祈り

修験の本質は、祈りである。自分のためではなく、他者への祈り無くして、真の修験とは言えない。

祈りとは、起源意識から流れ出る負のエーテルエネルギー＝S 極系エーテル繊維（エネルギー）に共鳴し、大宇宙と一体化して、新たな現実を創造していくことである。これは、私利私欲＝エゴを満たすための創造ではない。エゴは宇宙の法則に反しているので、破壊され、消滅する運命にある。そのための修行の場として、S 極系エーテルエネルギー密度が高い場所＝山が選ばれる。そのような山の地下には地殻エネルギーが集中しており、祈りは崩壊をもたらすような地殻活動を抑制する効果をも、もたらしている。

祈りだけではなく、人々の思考は現実に影響を与える。地球意識プロジェクトのために設置された乱数発生機では、時々データに大きな偏りが生じる事が

あり、2008 年のアメリカ大統領選挙の時などは顕著だった。(テレビ番組『モーガン・フリーマン　時空を超えて（NHK)』）乱数発生はランダムだが、そこに偏りが生じたことは、人々の意識が乱数発生機に影響を与えたと言える。乱数発生機は 0 と 1 を等しい割合でランダムに発生させる電子回路で構成されている。つまり、思考が電子に影響を与えたのである。

電子は S 極磁気単極子の周りに N 極系エーテル繊維（電荷）が巻きついたものだから、思考の本質である S 極系エーテルエネルギーが作用した、ということである。そして、全宇宙が S 極系エーテル繊維で結ばれている以上、思考・祈りのエネルギーは宇宙レベルで現実を動かす。

地球をエネルギー的に見るならば、エネルギーを媒介する光ファイバーのネットワークのように見えることだろう。そして、いわゆる聖地は、エネルギーが入ってきたり、湧き出るスポットである。このエネルギーのネットワークは、欲望のために他者を捕える蜘蛛の巣ではなく、エネルギーが共鳴して新たな創造を成すためのものである。

地球のエネルギーネットワークモデル図

https://pixta.jp/tags/%E5%85%89%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%90%E3%83%BC%20%E5%85%89%E5%9B%9E%E7%B7%9A%20%E3%83%8D%E3%83%83%E3%83%88%E3%83%AF%E3%83%BC%E3%82%AF%20%E5%9C%B0%E7%90%83?search_type=2

地殻活動の主な原因はマグマである。前述のように、マグマの主成分のケイ酸塩鉱物＝シリカは正四面体構造を取り、負のエーテルエネルギーを媒介するから、起源意識やシリウスからの負のエネルギーがマグマに作用する。

マグマ＝火は S 極系エーテルエネルギーが物質として顕現化したエネルギー的動脈に相当する。そこから太古に発生した地表の水は、地球の静脈に相当する。そして、聖地の山からは、清浄な水が湧き出す。火と水で火水＝かみ＝神！故に、修験の祈りでは、火と水による護摩焚きなどを行う。

https://blogs.yahoo.co.jp/yamato2863/44381800.html

また、水に関わる水天宮では、天御中主神を祀る。液体の水は比透磁率が 1 より小さい＝負の透磁率で、これは負の磁化率と同義であり、負のエーテルエネルギーを媒介することができる。負のエーテルエネルギーは、起源意識＝天御中主神から S 極系エーテル繊維として全宇宙に流れ出ている。このエーテル繊維のねじれは対数螺旋構造を成し、あたかも龍が動いているかのようにも見なせる。

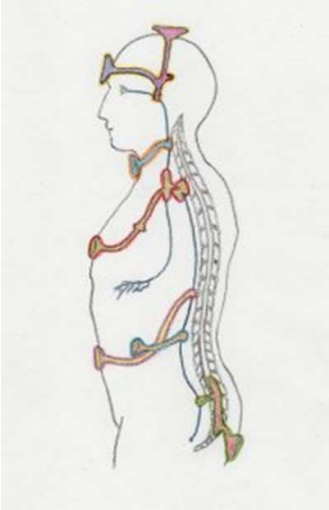
よって、水神や龍神の本質とは、起源意識から流れ出る S 極系エーテル繊維であり、眞名井から湧き出る水の真意でもある。これが、地球に於いては龍脈・龍穴である。

https://search.yahoo.co.jp/image/search?rkf=2&ei=UTF-8&p=%E9%9B%B2%E9%BE%8D%E5%9B%B3

人体には、物質としての体という器に、S 極系エーテルエネルギー＝起源意識の分霊が入って體（からだ）となり、霊人＝ヒト＝日人＝火人となる。また、人体の約 60 パーセントは水分であり、S 極系エーテルエネルギーの良い媒体である。従って、火と水による祈りは、人体を通じ、起源意識に共鳴することを

増幅させることになる。また、音（＝音霊）の波動も共鳴を手助けする。その一例がマントラであり、また、祈りの際に楽器が奏でる音である。

S 極系エーテルエネルギーは、人体のとりわけ尾てい骨付近に S 極磁気単極子として封印され、クンダリーニと言われる。これを開放するとされるのが、肉体的なヨーガの極意である。クンダリーニのエネルギーは S 極系なので、それが上昇して解放される道筋＝脊椎は S 字型なのである。



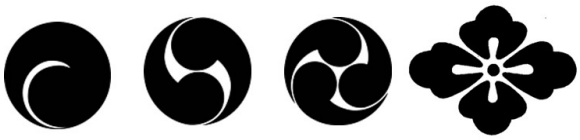
http://haroisystem.com/sakana/topics.php?TOPICS_ID=zazensaho_11

このようなことは、かつて人類は解っていた。それは、これまで見てきたように、カバラによって様々な象徴として、宇宙の真理が暗示されてきたことでも、明白である。それを、エゴという鎧を纏っていくことにより、次第に解らなくなっていき、ついには、エゴがもたらす“富”こそが人間の生きる目的、となってしまった。その富とは、他の人の犠牲の上に成り立つモノ、カネ、土地などである。

さて、エゴも祈りも、いずれも心の作用である。心の本質もまた、S 極系エーテルエネルギーである。心について、忍術道場の宗家が歌を詠まれている。宗家は絵を嗜まれるが、そこに添えられていた歌である。

・心こそ　心迷わす心なり　心に心　心ゆるすな

“心”は起源意識を意味する“ゝ＝一つ巴＝1 つ目”が 4 つ合わさって構成されている。すなわち、四つ巴である。宇宙は一つ巴に始まり、物質界の陰陽の均衡＝二つ巴を経て、生命体の進化＝三つ巴による「生命の樹」の螺旋上昇となり、更なる高み＝四つ巴に達する。この四つ巴は、真理を悟り、起源意識と一体化した状態で、神宮の花菱でもある。



一つ巴　二つ巴　三つ巴　神宮の花菱

http://kamondb.com/kika/tomoe.html

この状態に至るには、すべてのエゴを取り去り、あらゆるものには神が宿っており、神の分化＝部分であって、かつ、神を構成する全体でもあるという、眞名井の真理、和多志の精神が不可欠である。さもなくば、三つ巴は「生命の樹」が「合わせ鏡」で鏡像反転した「死の樹」を下降して退化し、大宇宙の法則に反するが故に、消滅する運命＝破壊！となる。

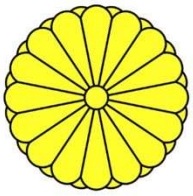
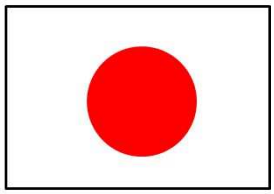
すなわち、“忍（しのび）”の本質とは、心の刃（やいば）＝エゴを制すること！それが武道に於いては、勝ちたいというエゴを捨て、無の境地に至り、肉体が自然と反応して動きとなる。
理不尽なことや辛い目にあったとしても、常に心を静かなる水面の如く穏やかとし、すなわち、起源意識と繋がる意識を持ちながら日々の生活を全うすることこそが、カルマの解消にも繋がる“真の修験”なのである。

エゴとは、突き詰めれば、所有欲である。それは単にモノ、カネ、土地などの所有欲のみに非ず！権力、名声、賞賛などを欲しがることも、エゴである。（いずれも、他者に勝ちたいことが共通している。）資本主義、共産主義などの名を借りた、エゴが原動力となっている搾取主義から、共に生きる“和多志”の共生社会へ！これこそが、創造神＝起源意識の御心を体現した社会である。他の人を踏み台にして搾取している社会は、創造神の御心にはそぐわない。
かつての日本では、縄文時代や江戸時代、理想に近い共生社会が実現していた。現在、世界各地で民族や様々な集団のエゴが激化し、敵対して分裂し、分裂が敵対を増幅している。これは、人類が核を分裂させたことにも関わっている。核分裂の増加は、人類の分裂の増幅でもある。何故、そう言えるのか？
全宇宙は、S 極系エーテル繊維が対数螺旋構造を成して繋がっている。螺旋構造故に、相似形＝フラクタルとなるのであり、核の分裂と人類の分裂のフラクタル構造である。これを、日本では相似象（そうじしょう）と言う。日本が世界の雛形となっているのは、地球に於いて日本にエネルギーが集中し、日本が地球のエネルギー的な臍となっているからである。

社会、会社、いずれも“社（やしろ）で会う”と書くが、それに相応しい状態への転換。あらゆる分裂を解消して真の統一へ！これにより、アヌンナキから背負わされたカルマ、そしてアヌンナキ自身のカルマもまた、同時に解消されることとなる。それには、エゴという鎧を脱げば良いだけである。それにより、本来のあるべき姿に戻る。

最後に、祈りに関連して、日本人ならば是非、知っておいて頂きたいことを。それは、世界最古の王家に連なる天皇陛下の御存在である。天皇陛下は、祈りの御存在であらせられる。日々、国民の安寧と、世界の平和をお祈り遊ばされる。天皇陛下を戴く日本という國に生を受けた奇跡を、心から感謝したい。

https://www.kunaicho.go.jp/page/gonittei/photo/18774

君が代は
千代に八千代に
さざれ石の
巌となりて
苔の生すまで

天皇弥栄（すめらぎ　いやさか）！